
男達

N澤巧T郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男達

【Nコード】

N5529A

【作者名】

N澤巧T郎

【あらすじ】

様々な男達を一人一話で描く。その瞬間、男達は何を思っているのか。

1人目『強くなった男』

交差点を渡るとき、おばあちゃんを助けてあげた。

いつもは絶対にしないこと。

人に優しくなんかしたことない。

何で今日に限って……。

多分、それは自分が弱くなっていたから。

大切な人が去って行ったから。

なんだか足元がおぼつかないおばあちゃんを見て、自分を見ている
みたいだった。

自分が弱くならなくちゃ、相手の弱さはわからないんだな。

そんなことを思いながら、俺はおばあちゃんの手を引いて交差点を
渡りきった。

しわくちやの顔をもっとしわくちやにしておばあちゃんは言った。

「ありがとうございました」

生まれて初めて言われたかもしれないその言葉。

—このおばあちゃんは弱くない—

自然と俺は大切な人のもとへと走っていた。

『ゴメン』

初めて言ったかもしれないその言葉。

その時、俺は弱さを知った強い男になった。

2人目『気づいた男』 3人目『伝説の男』 (前書き)

一話が600字以内だったため2話同時掲載

2人目『気づいた男』 3人目『伝説の男』

今日、名前も知らない女の子から告白された。

顔は何度か見た記憶があった。

明日返事をするという約束をして、俺はその場を去った。

家に帰ってから、彼女の顔が頭から離れない。

いつもより3時間速く床に就いて、いつもより6時間遅く寝た。

朝起きると、全てのものが変わっていた。

いつもウザイと思っていた小鳥達の声も、見てみるとムカついてくる青空も、なんだかいつもと変わっていた。

すべてが綺麗に見えた。

すべてが美しく見えた。

いつも吐き気がする母親の小言も、なぜか耳を傾けていた。

いつも消えてなくなればいいと思っていた母親が、なぜかいつまでも長生きしてほしいと思っていた。

まさかこんなに物事の見方が変わるなんて。

自分はとても複雑で、他のクラスの奴らとは違う。

そう思っていた。

別に何も変わらなかった。

オレも単純だった。

バカだと思ってた奴らと同じで、俺もバカだったんだ。

今日は

―初めて人と腹を割って話せるかもしれない―

3人目 『伝説の男』

いま、俺の周りで流行っている遊びがある。

それは道路を走ってる車の前に飛び出すというものだ。

これは点数制になっている。

車の車種や大きさ、走ってきた車の速さなどによって変わる。

他にもぶつかるかぶつからないか、骨を折った折らないか、死ぬか死ななかったか。

いまだに死んだやつはいない。

死ねば10億点入る。

一気にトップだ。

今のトップは前田の1億点。

今、病院のベットの上でずっと眠っている。

トラックの前に出てそのまま跳ねられた。

運転手は雑誌を読んでいた。

そして今日は俺の番だ。

何の刺激もなかった俺の人生。

毎日が同じことの繰り返し。

学校の話題はいつも同じ。

もう飽きた。

道路の横に立つ。

周りでは他の奴らがしゃべってる。

一人の男がしゃべりかけてきた。

「あの車なんていいんじゃないか？」

ワゴン車

俺は横に首を振る。

「じゃあアレか？」

乗用車

首を振る。

「なんだ？怖いのか？じゃあアレか？」

原付バイク

無視した。

「うわっ、暴走トラックだ」

向こうから誰が見てもスピード違反のトラックがやってきた。

俺は思わず笑ってしまった。

のこり50 m

「おいおい、なに笑ってんだよ」

40 m

「いやさ」

30 m

「びっくりしたんだよ」

20 m

「何に？」

10 m

「オレが……」

5 m

「待ってたのは……」

1
m

こいつだ

僕の学校には伝説がある。

「知ってるか？」

「ん？」

「あの伝説」

「ああ、あの」

「そう、あのバカの話」

「ホントバカだよな」

「命賭けるなんてアホだよな」

「ホント、ただの遊びだったのに」

「でもさ」

「ん？」

—ちよつとカッコいいよな—

4人目『見つけた男』 5人目『飛んだ男』 (前書き)

1話が600字以内だったため2話同時掲載

4人目『見つけた男』 5人目『飛んだ男』

4人目『見つけた男』

今日、親が風邪を引いた。

今まで風邪なんか引いたことなく、風邪なんかひくはずない思っていた。

いつもあんなにうるさいことを言っているけど、今日はとてもいつものように、はむかう気にはなれなかった。

「今日の夕飯は俺が作るしかないか……」

オレが台所に入ると、遠くのほうから小さい声がした。

俺は母が寝てる部屋に入った。

「なに？」

「私にも作って」

「えー。めんどくさい」

「朝から何も食べてないんだよ。このままだと飢え死にだよ」

「あゝはいはい、わかりましたよ」

料理と格闘すること1時間12分。

なんて疲れるんだ……。

ちょっと味見を試みる。

「うん。まずい!!」

飯を母の元に持っていく。

「あいよ」

「ああ、ありがとね」

パクッ

「うん、おいしい」

最近母の怒った顔しか見ていなかった。

熱のせいだったかも知れないけど、確かに母はオレの料理をおいしいといった。

今まで見たこともない笑顔で。

次の日、母は前以上に元気になった気がした。

俺はあの顔をもっと見たいと思った。

今、俺は料理の勉強をしている。

自分の料理で幸せそうに笑う顔を見たいから。

あの時の母のように。

あの日、俺は

—本当の笑顔と夢を見つけた—

5人目『飛んだ男』

何で俺は走ってんだ？

ハアハアハアッ

そうだ。

これは全員リレー。

俺はアンカーだったんだな。

いつものようにホームルームをサボってて、次の日学校に来たらアンカーにされてたんだ。

全く迷惑なことだ。

何でオレが？

まあ1年のときは速かったさ。

だけど、もう部活もやめて何の運動もしてないんですよ。

タバコだってやってるし、酒だって飲んでる。

っていうか昨日も飲んでてちょっと二日酔い気味だし。

だけどなんでアンカーは2周なんだよ。

もう足がうごかねえっての。

ああ、もう駄目だ。

どんどん離されてってるよ。

足がうごかね。

重え……。

遠のく意識の中、小さな声が聞こえてきた。

「ガンバレー」

ハッ！！

俺は声ができるほうに目を向ける。

するとクラス全員が叫んでいた。

「行けー！！」

「がんばれー！！」

「そこだー！！」

一歩、また一歩、俺の脚が前に進んでいく。

前のヤツの背中がどんどん近づいてくる。

あと一歩。

―抜ける―

ゴオオオオオオオオオ！！

実況が叫んだ。

ハアッハアッハアッ……。

ま……負けた……。

ハア……ハア……。

……ふう……。

ま、いいか。

久しぶりに全力疾走した爽快感。

流した汗が地面に落ちる。

今まで胸の奥にあったいやな気持ちが汗とともに、この広い大地に流されおちた。

リレーでは負けたけど、総合得点では見事に優勝することができた。

その時、俺は胴上げされた。

俺の体は重力から開放され、青空に吸い込まれていった。

―人間は翼を持たなくても空を飛べることが出来るんだ―

6人目『くやしがった男』

6人目『くやしがった男』

スピードスケート500m決勝二日目

「さあいよいよ金メダルが見えてきましたね」

「そうですねえ。一日目で自分の持っていた世界記録を大幅に更新しましたからね」

「彼は一体何者なんでしょうかねえ」

「そりゃもう天才の一言に尽きると思いますよ」

「ですよねえ。なんせスケートをはじめてまだほんの少しですからねえ」

「まさに天才ですよ。初めて出場した公式レースでいきなり世界記録ですから」

「史上最強のスピードスケーターと言ってもいいんじゃないですか？」

「そうですね。彼は最強ですよ」

「それと彼の発言にも毎回驚かされますよね」

「そうですねえ。彼のその無謀とも呼べる発言。しかし、それを軽

く実行してのけてしまう実行力。まさに天才です」

「今回も一日目、二日目ともに世界記録で金メダルを取ると言っています」

「すでに昨日も世界記録を出していますからね。やってくれるでしょう」

「さあ、いよいよ最終組、彼の出番ですが、どうですか？表情というか見たところの体調といいますと」

「いいんじゃないですか？いつもどおりですよ」

「そうですね。現在2位のタイムを見る限り、メダル圏外になることはないと思うのですが」

「そうですね。たとえ世界記録でなくても、七割くらいの力で走っても金メダルですよ」

「そうですか。さあ、二人とも位置につきました」

パン

「さあスタート！！最初の100メートルはどうだ！？」

「いいですよ。ちゃんと氷を掴んでいます」

「おおっとこのタイムは昨日より速いぞ！！」

「世界記録ペースですね」

「さあ、バックストレート。ここで内側のレーンへと移ります」

「いいですよ。乗れてます。内へ入って」

「さあ！まもなく最後の直つと転倒だああああ！！！！！！」

「あああああ！！」

「これはどうしたことかっ！！！！？壁に激突！！！！」

「うわあ！！これはっ、ああああ！！！！」

「ここで抜かれます。ああつとでもすぐに起き上がる！！が、なにかフラついています！！！！」

「頭から激突しましたからね。気を失わなかったのが不思議です」

「ここで先にゴール。ああ、いま懸命にゴールへ走っています」

「最後まで、最後まで滑って貰いたいです」

「こ、こ、で、ゴールです」

「いやあ、よく最後まで走りました。あっ」

「ん？おっと、これは。なんと、2位です！！！！転倒したのにもかかわらず2位です！！すごい！！！！すごすぎる！！！！」

「…彼、泣いてませんか…………？」

「ん？ ホントです。泣いています。これは嬉し涙か？」

「見る限り……違うみたいですよ」

「そうですねえ。しゃがみながら首を横に振っています」

「しかし、よくやりましたよ」

「そうです。よくやりました！！銀メダルです！！おおっと？いま立ち上がって実況席にも聞こえるくらいの声で“ちくしょう”と叫びましたねえ」

「ええ。こんな姿、初めてみますよ」

「そうですねえ。どんな大きな大会で勝っても涙は見せませんでしたからね」

「いえ、そういうわけじゃなくて」

「はい？」

「こんなにくやしがっている人間は、見たことはありません――」

7人目『泣いた男』 8人目『変わった男』 (前書き)

1話が600字以内だったため2話同時掲載

7人目『泣いた男』 8人目『変わった男』

7人目『泣いた男』

家に帰ったら、誰もいなかった。

いつもなら母がいるはずなのに。

ま、買い物にでも行ってるんだろ。

電話が鳴った。

電話を取ると、それは近所のスーパーからだった。

「なにやってんだっ!!」

電話を切って叫んだ。

スーパーについて、奥の事務所まで通された。

そこに母はいた。

首を下げ、うずくまるように縮んでいた。

母と一切しゃべることもなく、店長にお詫びを言って帰った。

帰り道

なにをしゃべっていいのか分からない。

すると、母が口を開いた。

「あんたらが悪いんだ」

いきなりの言葉に俺は戸惑った。

「な、なんでだよ」

「あんたもお父さんも、私を邪魔者みたいに扱って・・・一体誰が面倒を見てると思ってるの」

母は怒ってるんだか泣いているのかわからない顔だった。

確かにそうだった。

母は寂しかったのだろう。

母はつらかったのだろう。

母は一人だったのだろう。

俺は立ち止まった。

「ごめん」

「今まで・・・ありがとう」

母の目から涙が零れ落ちた。

初めて抱きしめあった。

母がなきながら言った。

「遅いんだよ・・・」

「ごめん・・・ごめんなさい・・・」

俺の目からも涙が零れ落ちた。

家に帰ると、母はいつものように夕飯の準備に取り掛かった。

俺はいつものようにテレビを見てくつろいでいた。

いつものように二人に会話はなかった。

だが

―二人の心は通い合っていた―

8人目『変わった男』

目に涙を溜めて道を早足で歩いてゆく。

今のままじゃダメだってことぐらいわかってる。

だけど、そんな簡単に変わることなんて出来ない

涙を流して誓っても、次に日にはまたいつもの自分がいる

何でこんなに変わることが難しいんだ

頭の中で理想の自分を考えるのは簡単だ

だけど、それを実行するのが何でこんなに難しいんだ

こんなにもなりたいた願っているのに

どうしても踏み出すことが出来ない

本気になれない

向こうに待っているものが今までにない最高の場所だってわかってる
わかってるけど目の前にある苦痛を見るだけで足が止まってしまふ

目をそむけてしまふ

――俺って弱い――

弱すぎる

認めたくないけど

――俺って弱い――

――最低だ――

だけど

――あきらめたくない――

自分を

――あきらめたくない――

立ち上がりたい

這い上がりたい

どんなことしてだって前に進みたい

目の前の壁がなんだってんだ

夢のためにはその壁を何枚も何枚も乗り越えないとダメなんだ

ぶっ壊さなきゃいけないんだ

それなのに何してんだ!?

――俺――

何してんだ!?

行け！！

進め！！

さあ

今からだ！！

—明日じゃない—

—今度じゃない—

—今からなんだ—

やってやる！！

なってやる！！

—絶対に！！—

この瞬間

―男は変わった―

9人目『守った男』

ある朝、一人の男が目を覚ました。

「そうだ・・・いかなくは・・・」

男はみんなが寝静まっている間に支度をし、足早に家を出た。

男は駅員になにか訪ねている。

そして指示された電車に乗った。

男は電車に揺られながら思い出していた。

ずっと昔のことを。

今でも色褪せることなく残っている思い出を。

「おかあさん。おじいちゃんがないよ」

「え？おとうさんが？そういうば・・・いないわね。ねえお母さん。お父さんしらない？」

「さあねええ。起きたときには、もういなかったからねええ」

「えっ！！うそっ！！それって大変なことじゃないの！？」

「おじいちゃんたいへんのなの？たいへんのなの？」

「心配することないよおお。おじいちゃんはねええ。約束を守りにいったんだよお」

「やくそく？」

「そう。約束」

その頃、年老いた一人の男は雲の上にいた。

小さい窓から眼下に広がる一面の雲の草原を見て、何を思っているのか。

その顔はすこし微笑んでいる。

「おかあさん。約束ってどういうこと？」

「あの人はねえ。若かったころは、世界中を飛び回ってたんだよお」

「へー。そんなの初めて聞いた」

「出会った頃に良く話してくれました。・・・その時、あの人は言ってたねえ。約束したって」

「それって……どんな？」

「男と、男の、約束だ。ってね」

一人の年老いた男はタクシーから降りていた。

そして近くの人に話しかける。

話しかけられた人は指を刺し、ある方向を示した。

男はその方向へと歩いていった。

すると、エメラルドブルーの空と、蒼く澄んだ海を、イスに腰掛け静かに眺めている人物が一人。

その遠い昔の記憶と一切変わることはない光景。

男はゆっくりとイスに座っている男に近づいていった。

ふと、イスに座っている男が振り返った。

しわくちやの顔が次の瞬間よりいっそうしわくちやになって男を見つめた。

男もしわくちやの顔をしわくちやにして男を見つめ、近づいていった。

イスに座っていた男は杖を使ってヨロヨロと立ち上がり一步一步確実に近づいていった。

二人はゆっくりとだが着実に近づいていった。

一歩、また一歩足を踏み出すたびに記憶が滝のように押し寄せる。

そして二人は力強く抱きしめあった。

昔、別れのときに抱きしめあった時より、体は小さくなっていた。

しかし、その友情は

―その時の数倍の大きさになっていた―

10人目『笑った男』

「ありがとうございます！！」

子供達の元気な声。

「さようなら」

学校の選択授業で保育実習があって今日はその最終日。

さよならをしても子供たちは私達ひよっこ先生の周りを離れようとしな

ワイワイ

ガヤガヤ

ワラワラ

ふと横を見る。

他のみんなより少々ちいさな子供ばかりができている。

最初の授業の時、一緒に教室にいたときはホントびっくりした。

だって無愛想だし人見知りだし、ホントに子供好きなの？って思った。

でもまあこうやって子供達からも慕われてるし、やっぱり子供が好

きなのかなあ？

でも……まだ一回も満面の笑みを見てない。

今だってちよつと顔が緩む程度だし。

一体どんな顔で笑うんだろ……。

その時、彼の前に出来ていた子供だかりが一斉に二つに分かれた。

あの子が立っていた。

あの子って言うのは変わっているというか、とても個性的な子で、いつも一人だった。

保母さん達も少々困っているみたいで、私が話しかけたときもずっと地面に寝そべって横を向いてジーっとしていて……。

正直、私は少し怖いと思ってしまった。

他の子供達もこの子のことを怖がってるみたいで。

そういえば彼、あの子の隣にずっといたっけ。

あの子が彼に近づいていく。

すると彼の周りにいた子供達がどんどんと離れていく。

あの子が彼の前にやってきた。

彼は膝についてあの子を見つめた。

「元気でね」

彼は満面の笑みでそう言って、強く優しく抱きしめた。

「いかないで」

泣きじゃくりながら、彼の服をギュッと掴んで放さなかった。

彼らの間にどんなやり取りが交わされていたのか。

あの子から離れた私達にはわからない。

わかった事と言えば、私に尊敬できる人が一人増えた事と。

誰よりも子供を愛している彼の笑顔を

“一生忘れられそうにないということだけ”

11人目『笑ってた男』

「また泣いてんのかよ」

彼は決まって僕が泣いてるときにあわられる。

「泣いてなんかないよ」

僕は決まって彼にそう言って、涙をぬぐうんだ。

すると彼は決まって僕に言うんだ。

なら

—笑えよ—

ボクには怖ろしい力がある。

ボクには大きすぎる力が。

野良犬がボクを噛もうとした時だ。

ボクは初めてボクの力を見た。

それがボクはとても怖くてこの場所で泣いてたんだ。

その時だ。

彼が現れたのは。

それからいろいろ彼と話をした。

彼は言ったんだ。

「その力を使いたいときが必ず来る。だけど、絶対に使っちゃいけない。絶対だ。」

「なぜ？」

ボクは質問した。

「笑えない一生を過ごすつもりか」

「力を使いたい」

何回も何回も思った。

だけど、ボクは使わなかった。

ボクは力を使う代わりに涙を流した。

それでいいと思った。

―笑えよ―

その言葉が聞ければ笑えるから。

「また泣いてんのかよ」

現れたのは、彼じゃなかった。

「いつもどこで泣いてんのかと思ったらこんな所で泣くってとはなあ」

助けて。

「おい。こっちだこっち。こんなところにいたぜ」

たすけて。

「今度は逃がさないぞ」

―タスケテ―

ボクは力を使わない。

力を使う代わりに、涙を流すんだ。

だけど。

ボクの涙は

―枯れちゃった―

ボクはヤツを直視した。

一生消えないんじゃないかと思うくらいに網膜に焼き付けた。

だけど、ヤツは一瞬のうちに消えていた。

その代わりに

―彼がいた―

気づいたら

すでに彼はこの世から存在しなくなっていた。

ボクは泣いた。

枯れてたはずなのに。

絶え間なく頬をつたった。

彼は

―笑ってた―

ニツコリと。

今まで見たことない満面の笑みで。

人生最良の時みたいに。

ボクには聞こえた。

――笑えよ――

12人目『つまづく男』

「あっ!!」

ドテッ

「イテテテテッ」

またつまづいてしまった。

俺って何でこんなにつまづくんだ？

昔からそうだ。

一日に一回は必ずつまづいてる。

足場の悪いところはもちろん平坦な道でも平気でつまづく。

なんでだ？

「歩き方が悪いんだよ」

前々からわかってたみたいと言ったのは俺の友人だ。

「お前はしっかりと地面に立ってない。両足でちゃんと地面に立て」

「そうか？俺はちゃんと立ってると思うけどなあ」

「それにお前は前ばかり見ている。前ばっか見てるから足元の石こ

ろに気づかないんだ」

「でもよう。そうすると電信柱とかに頭直撃するんだよなあ」

「足元ばかりを見ろといってるわけじゃない。前も見て、なおかつ足元に意識を持って歩く。そうすればつまづかない」

「そうかなあ」

「それとだ。砂利道みたいにつまづきそうな場所なら小股でゆつくりと慎重に歩け。平坦で安全そうな道だったら大股でしっかりと歩け。その道その道の歩き方で歩け」

「でもよお。俺ってばどこでも転ぶからどこでもゆつくり歩かないとダメって事になっちゃわない？」

「だったら早く家を出るまでだ。ゆつくり行くなってわかってんだからそのために準備してればなんの問題もないだろう。それに、歩き続ければ絶対に目的地まで着くんだから」

「それだと朝もっと早く起きなきゃだめなのかあ。つらいなあ」

「つていうか。つまづいたって別にいいだろ」

「どうして」

ドテッ！！

「イテテテテ」

助言してもらってもやっぱりつまづく。

多分俺はこれからもつまづきっぱなしの人生なんだろうな。

でも、あいつの言うとおり。

つまづいたら

――立ち上がればいい――

13人目『裏切る男』

電車から降りると喉かな農村地帯が広がる。

「しかし、熱いなあ……」

薄くなった頭から滝のように滴り落ちる汗をネクタイでふく。

こういう日はメガネが邪魔臭く感じて仕方がないが、かけない訳にもいかず、かばんを持っていないほうの手の中指でメガネを押し上げる。

「ええつと……こっちな？」

よれよれのメモを頼りに歩き出す。

山に囲まれていて空気が濃い。

田んぼのあぜ道にはトンボを追いかける子供達。

夏野菜の最盛期だ。

「こ、こ、か？」

メモと家を交互に見比べる。

ガラガラガラ

玄関に鍵を掛けないのは無用心かもしれないが、これが田舎のいいところでもある。

「すみませ〜ん」

「ほいなく。どちらさん？」

部屋からひょこつと顔が出て来た。

「あの〜息子さんが帰ってるはずなんですけど」

「ああ、それならな、孫どもと山行って川遊びしてるだよ」

「お孫さんですか？」

「そじゃよ。今は夏休みじゃろ」

「ああ、そうですね」

「ほんで、なんの用じゃ？」

「いえ、たいしたことでは……」

「そうきや、暑かったべ？ひゃっこい水でも飲んで待ってる？な？ほれ？上がれ上がれ」

「いえ、おかまいなく」

「そうきや？遠慮せんで。ほら」

「いえ、ホントに大丈夫ですから」

「そうきや、ほんにひゃっこくてな、うまい水だど？」

「お気持ちだけで十分です。すみません。ありがとうございました」

2, 3度ペコペコお辞儀をして戸を閉めた。

ガラガラガラ

「川か……涼しそうだな」

トンボを追いかけていた子供達に聞くと快く教えてくれた。

しばらく指差したほうに歩いていくと川が流れていた。

川の流れをさかのぼっていくと山への入り口があった。

川を上っていくと彼がいるのが見えた。

二人の息子さんと楽しく川遊びをしている。

私は気づかれないように茂みに入って彼らを追い越し上流へ行く。

「ふー」

靴と靴下を脱いで、ズボンをたくし上げて川に浸す。

天国とはこのことをいうのかもしれない。

普段はうるさいセミの音も、今はなぜか心地良い。

川は透明で、魚が悠々と泳いでいる姿がよくわかる。

「ホントに……いい所だなあ……」

「そりゃそうだ。なんせ俺が育ったんだからな」

彼が下のほうから現れた。

私と同じように裸足でズボンをたくし上げていて、ところどころ濡れている。

「昼もいいが、なんていっても夜が最高だ。一面がホタルに星だ」

私の近くまで来て手を腰に当てながら言った。

「そうですかあ。それは楽しみですねえ」

「なら帰ってくれえ」

「それは無理です」

「そうか」

私たちは顔をあわせずに話し続けた。

「夜。ここに来てください」

「……わかった」

そういつて再び笑い声のするほうへ戻っていく。

「逃げるならその間ですよ」

彼は立ち止まり、こちらを振り向くことなく言った。

「……もういいんだ……。ここがいいんだ……」

私は左手の中指でメガネをクイツと持ち上げた。

彼の言うとおり夜は最高だった。

虫の音色に川のせせらぎ、ホタルが飛び交い空は満天の星空。

昼の暑さはなく、岩の上で寝そべっていた。

彼の足音が聞こえる。

「本当に最高ですねえ。いやあ、胸がいつぱいになる」

「そんな当たり前のことはいい。早くしてくれ」

私は起き上がり、かばんを持って彼の前に立つ。

「そんなに急がなくても……」

「さっさとしてくれ。もう準備は出来てる」

「……なんで……裏切ったんですか……あなたみたいな人が」

「説明しなくても、お前にはわかんと思ったんだがな」

「……すみません」

「そうやってすぐに謝るのはお前の悪い癖だ。お前は何も悪くない」

「すみません」

私はそういつてかばんの中に手を入れて、仕事道具を取り出した。

「……家族には……手を出すなよ」

「大丈夫です。その命令は出ていません」

「出てれば……どうした……？」

「私をいじめないでください」

「そうだな……すまん」

私は、ゆっくりと銃口を彼の額に向けた。

その時だった。

大きな爆発音と共に村のほうが明るくなった。

「なんだ!!これはどういうことだ!!」

「し、知りません。こんなことは、聞いてない!!」

「くそう!!ちくしょう!!!!」

突然、彼のこめかみから、液体が噴出し、崩れた。

言葉もなく、呆然としていると、林のほうから一人の人物が現れた。
村からの赤い光がその人物を照らす。

同じ組織の人間だ。

「なぜ、こんなことをしたんだ!?!こんな命令じゃなかったはずだ!!」

私が興奮しながら言うと、彼は冷静な口調で答えた。

「あなたが受けた命令なんて知りませんよ。私は私が受けた命令を実行するまで」

「……なんで……なんで……」

「理由なんて知りませんよ。この人が他の人にしゃべってたかもしれないからじゃないですか?」

「そ、そんなはずないだろう。彼が他の人にしゃべるなんて!!」

「ていうか。別に理由が何であれ私はかまわないですし。久しぶり

に規模の大きい仕事が出来て私は満足ですからね」

「……そんな……」

「それじゃあ、私はまだ任務がありますんで」

彼はそう言って消え去った。

私は力の入らない足を動かして彼へ近づく。

一歩近づくたびに彼との思い出が湧き上がる。

教わったことが多すぎる。

感謝しても感謝しきれない。

こんな仕事だ。

別れる覚悟は出来ていた。

だけど、こんな別れ方なんて。

足元の彼から視線を村へ移す。

駅から降りたときの田園風景が頭をよぎる。

農作業をしていた人々。

快く私を迎えてくれた彼の父。

無邪気な子供達。

「家がー!! 家がー!! お願いします!! 中にまだ家族が!! お願いします!!」

足に必死で食らいつきながらお願いする人の額に、冷たい感触が。

その人はひきつった声を出しながら地面に転がった。

「うああああん!! ああああああ!!」

炎が踊る家から子供がわんわん村中に響き渡るような泣き声を発しながら出て来た。

子供に銃を向けた。

「……そこをどいてください」

子供の前で仁王立をしている男が1人。

後から炎の光で照らされ、少し影になっている。

「ふう。やれやれ。アナタですか」

そっくり残すとそこに姿はなかった。

私のことを知らせに戻ったのだろう。

判断が速い。

勝てるのか？

「うああああん！！！！ああんあんあんん！！！！」

後から子供の泣き声が。

「もう大丈夫だから。ごめんね」

他の人も助けないと。

涙で濡れた子供の手を握り走る。

あなたが裏切ったとき、私はアナタの気持ちが変わらなかった。

だけど、今なら少しわかる気がします。

あなたの裏切った理由はわからないけど。

私の裏切る理由は、

—今、私の手の中にあります—

14人目『祈る男』 15人目『大きくなった男』 (前書き)

1話が600字以内だったため2話同時掲載

14人目『祈る男』 15人目『大きくなった男』

14人目『祈った男』

僕に出来ることは、これくらいしかないんです。

僕はキミを連れ出した。

キミは疲れてそうだったけど。

しっかりと笑っているのがわかって嬉しかった。

僕らはエレベーターに乗り込んだ。

ドアが閉まる。

しばらく二人だけの静かな時間が過ぎていく。

十秒か二十秒だけだったかも知れない。

だけどボクにとってこれほど濃密な時間はなかった。

それは今でも変わらない。

ドアが開くと新鮮な秋の風がエレベーターいっばいに僕らを包んだ。
外の世界はちょうど夕暮れ時で、夕焼けが紅葉の山々を紅く燃やしていた。

山だけじゃなく、ボクらが住んでいる街全体も燃やし尽くす。

—僕は祈る—

もう少しで尽きてしまう彼女の命よ。

今にも消えてしまいそうな小さな火よ。

燃え盛れ。

世界を燃やす、あの太陽の如く。

ニコニコニコ

「なんでいつも笑うんだよ。こっちは真剣だったんだぞ」

「だって、幸せなんだもん」

そうやって微笑むキミを見て、ボクも笑うんだ。

いつものことだ。

15人目『大きくなった男』

「おつかいに行ってきたくない？」

そういわれてぼくはメモとおサイフを渡された。

おつかいなんてへっちゃらさ。

おかあさんと一緒に何回も何回も行ったことがあるもん。

「いってきまーす」

「いってらっしゃーい」

ガラガラガラ

あれ？

道って、こんなに広がったっけ？

ぼくは、急に怖くなってきちゃったんだ。

でも、家には戻れない。

だって、ぼくは男の子なんだから！！

この道でいいんだよね。

ぼくはおどおどしながらもスーパーにやってきた。

おおきなカゴを持って店に入った。

知らない人でいっぱいだ。

きよろきよろしてるとおばちゃんに話しかけられた。

ぼくはメモに書かれてる物を言うとその場所を快く教えてくれた。

「ありがとうございました」

「道草しないで帰るんだよ」

お礼を言ってレジに行ってお金を払った。

レジで貰った袋は、ぼくには少しおおきかったけど、引きづらないように気をつけて帰っていった。

太陽がかたむく道の上を歩きながら思った。

家を出たとき、あんなに広いと思った道が、今はとても狭く感じる。

それはたぶん、おおきくおおきく伸びた影のせいだ。

ガラガラガラ

「ただいま!!」

「おかえりなさい。あら？見ないうちに

—なんだか大きくなったんじゃない？—

16人目『蒔いた男』

「あり？」

今日、庭に一輪の花が咲いていた。

「おゝい」

妻を呼んで聞いてみた。

だけど妻も昨日まで芽すら出ていなかったのだという。

「不思議なこともあるもんだなあ」

そう言つて物思いにふけてしていると子供が庭に出て近寄つた。

「綺麗なお花れす。いったいなんのお花なのよさ」

確かに言われて見れば見たことがない。

チューリップでもパンジーでもアジサイでもヒマワリでもアサガオでもスイートピーでもましてやラフレシアでもなかった。

いままで見たことがない。

そう。

いままでこんなに綺麗な花は見たことがなかった。

「そうなのれす！このお花を観察するのよね！！」

ちょうど子供の夏休みの宿題の自由研究にぴったりだった。

「おおきくなるんれすんよ」

そうやって水をあげると、水滴によって花はキラキラと光だし、より一層綺麗に見える。

翌朝、花の下に種が一つ二つ三つと落ちていた。

「花も散ってないのに変なもんですなあ」

「そんなこといいのよさ。さっそくお庭に蒔きますれす」

そうやって花の隣に蒔いて水を上げた。

その日の夕方、ふと庭を見るとそこには数本の花が咲いていた。

「よよよっ、こりゃ驚きだ。あの花の種なのにまったく違う種類の

花のようだ」

そうなのだ。

一本として同じような花を咲かしていない。

そしてやはり今まで見たことのない花ばかりなのだ。

言うまでもないが、全てが全て美しい。

そんなこんなで1週間もしないうちに家は美しい花園となった。

庭だけでなく家の中も花で埋め尽くされている。

そうしていると周りの家の人たちが種をわけてほしいと言ってきた。

「ああいいですとも。もう蒔くところがなくてどうしようか迷っていたんです。夏休みの自由研究には十分すぎますから」

一人一人に両手一杯の種を分けてあげた。

次の日、花は街を覆いつくしていた。

その日、ちょうどヘリコプターがその街の上を通り過ぎた。

操縦者は眼下に広がる花畑に目を丸くして驚いた。

ヘリコプターは近くに降りたって話を聞いた。

「そういうわけでしたか。それは興味深い。どうか私にも種を分けてくれませんか」

町中からあつめた種を袋に詰めてヘリコプターの中に入れた。

しかし全部は入りきらない。

そこでヘリコプターの足に種が入った大きな袋をロープでくくりつけた。

ヘリコプターは重そうに飛びたって行った。

しばらく飛んでいると警告ランプが点滅した。

重すぎて燃料がなくなってきたのだ。

仕方ない。

種を捨てるしかないか。

袋に穴を開けて種を落としながら飛んだ。

そうすることで何とかヘリポートまで飛ぶことが出来た。

操縦者はすぐに友達に種の話をした。

「それはおもしろい花だ。ちょうどいい。ひとつ譲ってくれないか」

「そういうことは持っていくんですか？」

「もちろんだとも」

「それなら喜んであげましょう。しかし、出発は明日の早朝なのでしょう？重量制限とか大丈夫なのですか？」

「なくに。種の一粒くらいどうってことない」

翌朝

「スリー、ツー、ワン、ゼロ」

轟音とともにロケットが宇宙へと飛びたった。

「こちら管制室。地球の眺めはどうだい？」

「……言葉がでない……」

「そうだろうとも、誰でもこの青い地球を見れば感動するよ」

「……ちがうんだ……そうじゃないんだ……」

「え？違うって？」

「……青くない」

「それは、どういうことだい？」

「地球は、花色だ――」

「おつかれさま。宇宙はどうだった」

「我が家が一番。っていうのは、あれは嘘だな」

「あははは、よく言うよ。それはそうと、キミもやってくれるな」

「いやいや、僕は何もしてないよ」

「確かにそうだ」

「おいおい、ちょっとは否定してくれよ」

「あははは、まあいいじゃないか」

「そうだな」

「乾杯しよう。この宇宙一美しい惑星に！！」

「そして、宇宙一美しい衛星に！！」

『カンパニー！！！！』

夜でもなお、色鮮やかな大地の上で。

地球と同じく花色に染まった月の下で。

17人目『ぶつかる男』

目の前になにやらパントマイムをしている人がいる。

それにしてもうまいなあ、ホントにそこに壁があるみたいだ。

そう思いながらすれ違おうとしたその瞬間。

ドン！！！

「アイタ！！！！タタタタ……」

いきなりなにかにぶつかった。

「ええ？うそーん！？」

確かになにかある。

目の前の人もおでこを赤くしている。

「なんなんだこの壁は！！」

ドンドン！！

ゲシゲシ！！

「これじゃあ会社に間に合わないじゃないか！！」

ドンドン！！

ゲシゲシ!!

すると子供がやってきた。

「おじちゃんたちなにやってんの？」

「いや、ここに見えない壁があるんだ」

壁の向こうの人もうんうんと首を縦に降る。

「え、うっそだ」

ヒョイ

「あぶつ、な、い……」

「なんにもないじゃーん」

「え？うそ？あれ？飛ぶのか？」

ヒョイ

バコチーン!!

「アイター!!これ痛いっ!!ベリー痛いっ!!ベター痛いっ!!
ベスト痛いっ!!」

向こうの人も同じようにおでこに両手を当てて地面をゴロゴロしている。

「あはは、おっかしいの」

そう言って子供は走って行ってしまった。

ようやく痛みも引き、立ち上がると壁の向こうの方から犬とネコが現れた。

ネコを犬が追う。

猛スピードでやってくる。

「あぶなっ!!」

ダッダッダッダッ

犬とネコが猛スピードで横を通り抜けていった。

ネコから視線を前にもっていく。

壁の向こうにいる人と目が合い、深く一回うなずいた。

後ろを向き距離を置く。

振り返る。

おおきく一つ深呼吸。

ダッダッダッダッダッ

ダッダッダッダッダッ

ダダダダダダダ

ダダダダダダダ

ダダダダダイーン!!!!!!!!!!

「ムヘハッ!! ムキョー!! ウキー!! ヒー!! フイー!! ホエー!!
ああああああ!!!!」

「あれ? ここはどこ? 私は私……ここは? ああそうか、壁があったんだっけ。あゝ。記憶が……」

ふらふらしながら立ち上がって考える。

いったこれは何なんだ。

こうなったら力づくだ。

急いで家に帰って週末にデパートに行くときしか乗らない車に乗り込んだ。

ブルルルルン!!

すごいエンジン音と共に壁へと一直線。

これで壁も木っ端微塵だろう。

「はっ、待てよ。もし壊れなかったら……こっちが木っ端微塵!!」

バツ

勢いよくドアから外に飛び出した。

ドゥーン!!!

汚れた背広で、黒い煙を上げながら勢いよく燃える車を見つめた。

警察に電話をし救助を求めた。

拳銃で撃ったがダメだった。

ダイナマイトで爆破した。

地面がえぐれるだけだった。

戦車で突撃した。

ひっくり返った。

どんな手段を使っても壁を壊すことは出来なかった。

結局、この男が壁の向こう側へいくことはなかった。

この男だけじゃない。

世界各地で突如として壁が出現したのだ。

ほとんどのものが壁の向こうへ行くことはなかった。

しかし、なかには向こうへ行くことが出来た人もいた。

何年だろう。

何十年。

何百年。

とにかく遠い未来のこと、とうとう壁を取り除く方法がわかってきた。

壁をなくすことが出来た人たちが集まりひとつの本にしたのだ。

最後にその中から抜粋した一部を載せて終わりにしよう。

壁をなくす方法

頭ごなしに否定してはいけない。

分かり合おうしなければならぬ。

くだらない理由で突き放してはいけない。

自分の地位や欲望に執着してはいけない。

周りの目に気をとられすぎてはいけない。

努力しなければならない。

真剣にならないといけない。

決意し、決断し、決行しなければならない。

世界は自分以外で出来ているんだと自覚しなければならない。

頭ではなく心で判断しなければならない。

最終的に自分でなんとかしなくてはならない。

壁があることに気づかなくてはならない。

―すべては気づくことからはじまる―

18人目『見つめた男』

扉を開けると、すでに客席は落ち着きを見せていた。

そりゃそうだ。

もうすぐ始まるのだから。

俺も早く座らなくては。

「ちょっとすみません。前すみません」

結構いい席に座れた。

これなら顔が見える。

会場が暗くなり、幕があがった。

照らし出される舞台の上にはピアノが黒々と光っている。

それと合唱用の壇と指揮者用の壇。

ぞろぞろと壇上に上がっていく。

みなさんでお辞儀をして指揮者が腕を振ると音が踊りだす。

「そういえば、順番聞いてなかったな」

音が飛び交うなか、そんな事を思っていた。

何組か過ぎたとき、会場が明るくなった。

「ただいまより、30分の休憩にはいります」

席に戻るとき面倒だからいいか。

……。

早く戻ってくれば大丈夫か。

席を立って会場の横にある入り口を見ると、人で溢れかえってる。段をのぼるのは面倒だが後の扉から出るか。

扉を開けると目の前が正面玄関になっている。

正面玄関はガラス張りになっていて外がよく見える。

「あれ……？」

おもわず声にもらしてしまふ光景が網膜に飛び込んできた。見慣れた人物が会場から遠のいていくではないか。

バンッ

ドアを乱暴に開けて駆け寄った。

「ちょっと待って。どこ行くんだよ」

振り返った彼女の目は赤く、涙がポロポロと流れていた。そんな彼女を見て、思わず俺は動揺してしまう。

わけがない。

彼女の涙は見慣れてるといえるか初めて会ったときも泣いてたし。

これまで幾度となくこんな場面に出くわしてきた。

今まではどうしたら彼女が泣き止むかを考えていた。

だけど今回は違う。

泣いててもいい。

ただ、舞台の上に登ってもらいたいんだ。

「ほら、戻ろう」

手を掴んで戻ろうとする。

だけど彼女は手を払って拒んで泣いた。

「やっぱり無理っ。出来ないよ」

両手で顔を覆いながら泣く彼女に言葉をかけた。

「大丈夫だって。いつもどおりでいいんだから」

「こんなの全然いつもと違うもん。こんな大勢の人の前でなんか絶対に無理」

首を横に振るたびに涙が飛び散り地面をぬらした。

「大丈夫だって。ほら、よく言うだろ？みんなかぼちゃだと思えばいいんだよ」

「そんなの無理っ！みんなはかぼちゃなんかじゃない。生きてる人間だもん！！」

彼女の両肩を掴んで顔を近づけて言った。

「だったら、

――俺に唄えばいい――

いつもみたいに、俺だけに唄えばいい」

しばらく時間が止まったかのように見つめ合った。

「それなら、大丈夫だろ？」

彼女は何もしゃべらず、ただ首を小さく一回下に傾けた。
涙で濡れた彼女の手を握って会場へ戻る。

「舞台の上に立ったら、俺だけを見ればいい。俺も、

—おまえだけを見るから—

な。わかったな」

聞き取れる限界の音量で“わかった”と彼女は言って、関係者以外
立ち入り禁止と書かれたドアの向こうへと旅立っていった。

ボタン

「……そうだっ!! トイレ!!」

本来の目的を思い出したが、目の前には長蛇の列が並んでいた。
ま、間に合うのか……?

急いで戻るとすでに会場は真っ暗で、アナウンスが流れていた。

「続きまして、特別プログラム……」

「すみません。前失礼します」

なんとか間に合ったみたいだ。

すると、光溢れる舞台のそでから、彼女が現れた。

広い舞台の上にただ1人。

伴奏者も指揮者もない。

舞台の上にはただ1人。

臆病で泣き虫で。

お世辞にも強いとはいえない。

かよわい彼女がただ1人。

会場は静寂に包まれていた。

中央まで歩き、会場を向いた瞬間。

彼女の目が俺を捕らえた。

彼女の目が、まだすこし赤いのがわかった。

彼女はゆっくりとお辞儀をした。

静寂を拍手が切り裂き、再び静寂が覆い尽くす。

彼女は俺だけを見る。

俺も彼女だけを見る。

彼女は深呼吸をするでもなく、大きく息を吸い込むでもなく。

いつものように。

口を開いた。

会場は

――奇跡で溢れかえった――

彼女は

—奇跡の声を待つ—

19人目『抜かない男』

武士が二人、5間ほど離れ、向かい合って立っている。

長髪の方が言う。

「刀を抜け!!」

短髪の方が言う。

「やだ」

長髪は少し苛立ちながら問う。

「なぜだ!!」

短髪は冷静に答える。

「その言葉、俺が言いたい。なんでおまえと戦わにゃならんのだ」

長髪はなおも苛立ちを見せる。

「なぜだ?!? 初めて会った時から言ってるだろ!! 俺は、誰よりも強くありたいんだ!!」

短髪は腕を組みながら言った。

「俺は、お前が思ってるほど強くない」

すぐさま長髪が言う。

「違う！！お前は強い！！今まで共に行動して来たからわかる。お前は強い！！ただ、それを隠

している！！なぜいつも刀を抜かない！？素手で刀に勝てるのはお前だけだ！！刀を抜けばもっ

と強いはずだ！！だから刀を抜け！！そして、俺と戦え！！！！」

短髪は少し間をおいて答えた。

「……だから、いやだって言ってるだろ」

「なぜだ！？」

短髪は遠くを見ながら言った。

「冬も終わって、暖かい風が吹いてきた。これから一斉に花が咲いて、虫や動物も元気になる。

空も一段と青くなって、雲が白く輝きながら揺れる

―それでいいじゃないか―」

短髪は、涙を流していた。

長髪は困惑しながらも言った。

「お前の言ってることは、意味がわからないっ！……いいから俺と戦え！……！」

短髪は涙を拭くことなく言った。

「刀と刀で戦って、それで勝ったほうが強いんだったら、それは強さとは言えない。ただ、刀の

扱いが上手いだけだ」

「ならば素手で勝負するか！？ お前の得意な！？」

短髪は首を横に振った。

「強さは……力じゃ測れない」

「いいから刀を抜けと言ってるんだ！……！」

そう言いながら長髪がずかずかと短髪の前まで近づき、短髪の腰にある刀を取り上げ、目の前に

差し出した。

「さあ、手にとれ！！そして戦え！！」

短髪は長髪の瞳を凝視しながら言った。

「刀が強さなら、お前にくれてやる」

「刀は武士にとって命も同然!!それを簡単に」

一瞬のうちに短髪が長髪の腰にさしてあった刀を抜き、一段と青くなつた空から花が咲き始めた

大地へと振り降ろした。

長髪が差し出していた短髪の刀が真つ二つになり、一つが落ちた。

「俺はたったいま死んだ。お前の命によってな」

長髪は差し出した腕を下ろすこともせず呆然と呟くように言った。

「……木刀……」

短髪は刀を光らせながら言った。

「刀が命?ホントにそんなこと言ってるのか?このただの鉄の塊が!木の棒切れが命なのか!?

違うだろ!!命ってのは!!」

拳を握り、力強く胸を叩き、言った。

「ここだろ」

長髪は力なく言った。

「おまえは……武士じゃない……」

「当たり前だ!!」

「俺は人間だ!!!」

なにが武士だ!!! なにが力だ!!!」

短髪は刀を地面に叩きつける。

「時代がおかしいんだ。強さと力を履き違えてるこんな時代が!!!
世の中が間違ってる!!! 狂っ

てる!!!」

短髪が後ろを向いて一歩足を踏み出した。

長髪が静かに言った。

「どうすれば、お前のように、強くなれる」

短髪は顔を横に向けて言った。

「俺は強くない。結局、刀を抜いちまった。刀は抜いちやいけねえ。
抜いちまったら、力になっ

ちまうからな」

春の温かい風を感じながら言った。

—お互い、強くなりたいもんだなあ—

「じゃあな」

短髪は歩いて行った。

短髪が見えなくなると、長髪は叩きつけられた刀を拾い、鞘に収めた。

それから二度と

—刀が抜かれることはなかった—

20人目『伝えたい男』

「それでは、皆さんお待ちかね。拍手でお迎えください。どうぞ！」

司会の人がそういうと、壇上の中央のマイクへ1人の男が歩み寄り、皆さんは拍手で迎えた。

拍手が少々弱まり、男は口を開いた。

「ええ、この度は、このような世界的にも有名な映画賞を、ええ、受賞しまして。ええ、それですね。一つ、なんて言うんですかねえ。質問といえますか、疑問といえますか。まあそのですね。

—言いたいことがある—

んですよ、ね。

……みなさんはこの映画をご覧になって、どう思われましたか？

どう、受け取りましたか？

私思うに……私の思いといえますか、考えといえますか。

—伝わってない—

みたいですネ。

……ええこの映画賞。

どういう映画が、受賞されるのかっていう、コンセプトと言いますか、ええ、何て言うのですかね、テーマですか。

それにですね。

―生まれ変わっても見たい映画―

とかですね。

―死ぬ前にもう一度見たい映画―

と、いうのがあるんですね。

それですね。

その映画に、今回私の映画が選ばれたというわけなんですけど。

……これは、

―私を侮辱しているとは思えない―

んですよ。

みなさんはすでに映画を見たと思うんですけど。

あなたたちは、

―一体何をしてるんですか―

そこで座って、何をしてる？

—今、何をしている—

この映画で伝えたかったことはただ一つ。

—今、なにをすべきか—

映画の中に嫌というほどちりばめたメッセージです！！

—今、なにをすべきか—

—今、なにをすべきか—

映画を見たのなら絶対に気づくはずだ！！

しかし、今、あなたたちはなにをしている！？

そこに座って、

—何をしている—

そこに座って、私の話を聞く。

それが、あなたの

—今すべきことですか—

賞の授賞式を見る。

それがあなたの

―今しなくてはいけないことですか―

映画のラストシーン。

あの二人のやり取りの中に、私の伝えたかったことの全てがつまっています。

―俺が今しなくてはいけないことってなんだ？―

―それじゃあ今してはいけないことってなんだ？―

―俺は何のために生きてんだ？―

―それじゃあ何のために生きたいんだ？―

―生きてることに意味なんてあんのか？―

―それじゃあどんな意味があれば生きたいんだ？―

人間は不完全な生き物です！！

時には間違いを選択するときもあります！！

しかし！！

一番してはいけないことを考えれば！！

―最悪の結果だけは回避することが出来る！！―

それだけじゃない!!

してはいけないことがわかれば!!

おのずと、

—今、なにをするべきか見えてくる!!—

もう一度、言います。

—今!!—

—あなたは!!—

—なにをしている!?!—

もし、このメッセージが伝わっていれば、

—もう二度と—

—この映画を—

—見ることはない!—

……これで……終わります」

パチ

パチ

パチ
パチ

パチパチパチ！！

パチパチパチパチパチ！！

パチパチパチパチパチパチ！！

パチパチパチパチパチパチ！！！！

パチパチパチパチパチパチ！！！！

パチパチパチパチパチパチ！！！！

パチパチパチパチパチパチ！！！！

会場はスタンディングオベーションとなった。

誰もが拍手をしながら立ちつくし、動こうとするものはいなかった。

その光景を見て、男が力なく呟いた。

―なにしてんだよ―

その言葉は会場全体に響き渡る拍手によってかき消された。

メッセージは伝わったのか、それとも伝わらなかったのか。

あなたには

—
伝
わ
る
か
—

21人目『抱きしめた男』

えんえんえん
えんえんえん

誰かの泣き声が聞こえてきたんだ。

その声は、とても辛そうで、苦しそうで、かわいそうで。

ボクは周りを見回した。

だけど泣いてる人なんて誰もいなかった。

おんおんおん
おんおんおん

泣き声はどんどんどんどんおおきくなってきた。

ボクはたまらなくなって耳を塞いでしゃがみこんだ。

だけど泣き声はボクの手のひらを通り抜けて耳に入り込んで来る。

その声は、とても辛そうで、苦しそうで、かわいそうで。

ボクはどんどんどんどん悲しくなってきた。

「えーん！！ えんえんえん！！」

ボクはたまらなくなって泣いちゃったんだ。

えんえんえん!!

えんえんえん!!

泣き声はどんどんどんどん大きくなってきた。

周りの人も耳に手を塞いでしゃがみこんだ。

だけど泣き声は手を通り抜けて耳の中に入ってくる。

その声は、とても辛そうで、苦しそうで、かわいそうで。

みんなどんどんどんどん悲しくなってきた。

「えーん!! えんえんえん!!」

「おーん!! おんおんおん!!」

みんなたまらなくなって泣いちゃったんだ。

えんえんえん！！
おんおんおん！！
えんえんえん！！
おんおんおん！！

泣き声はどんどんどんどん大きくなってきた。

ボクはもう立ってられなくなって、腰を下ろして両手を地面につけたんだ。

そしたら手をつたって泣き声が聞こえてきたんだ。

えんえんえん！！
えーんえんえんえん！！

おんおんおん！！
おーんおんおんおん！！1

やっぱりそうだ。

泣き声は腕を伝って聞こえてくる。

—キミだったんだね—

—辛かったんだね—

—苦しかったんだね—

—今まで—

—ごめんね—

ボクは手を広げて、地面にうつぶせになった。

ボクは

―地球を抱きしめた―

みんなも

―地球を抱きしめた―

泣き声はどんどんどんどん小さくなってきた。

ボクは耳を地面につける。

だけど、泣き声は聞こえない。

その声は、とても嬉しそうで、楽しそうで、幸せそうで。

ボク達はどんどんどんどん嬉しくなってきた。

あははは

うふふふ

みんな笑った。

ボクも笑った。

地球も笑った。

ボクは思った。

こんな小さなボクだって、

―地球を抱きしめてあげることが出来るんだ―

ボクは笑顔で地球に語りかける。

「悲しくなったらいつでも言っ
てね」

―僕がいつでも抱きしめてあげるから―

22人目『泣いている男』

男は泣いていた。

なぜ泣いているのか。

―その理由はわからない―

もしかしたら、自分には何の関係もないと思っていたところで大地震が起こり、そこに偶然居合わせた恋人が死んでしまったのかもしれない。

いつもそばにいたあの人が、もう顔を見ることも、触れることもできないところへ行ってしまったのだと実感したのかもしれない。

未来の自分が現れて、これからの人生何一ついい事など待っていないと告げられたのかもしれない。

男は泣いている。

―その理由はわからない―

明日、地球が崩壊してしまうのかもしれない。

もう止めることが出来ない争いが勃発したのかもしれない。

その原因が自分だったのかもしれない。

生まれてきた事を呪ったのかもしれない。

生まれてきた事を否定したのかもしれない。

それを自分ではない、誰かにしたのかもしれない。

男はなおも泣いている。

―その理由はわからない―

それはほんの小さな、ささいなことなのかもしれない。

明日、雨が降るからかもしれない。

占いの結果が悪かったのかもしれない。

靴下に穴が開いていたのかもしれない。

とてつもない花粉症なのかもしれない。

どこかで誰かが死んだのかもしれない。

—その理由はわからない—

何も考えずにした行動が、多くの人たちを不幸にしているという事実を知ってしまったのかもしれない。

良いと思ってしたことが、逆にその人を追い込んでしまい、後戻りが出来ないところまで行ってしまったのかもしれない。

言っではいけないと知っていたのに言ってしまい、あとでいくら謝っても許してもらえずに離れ離れになってしまい、とうとう二度と笑顔を見ることがなく永遠のさよならをしたのかもしれない。

この世で最も大切な人を殺され、仕返しにその人を殺したら、その人が他の誰かにとって、この世で最も大切な人だったのかもしれない。

なぜ男が泣いているのか。

—その理由はわからない—

ただ、一つわかっていることは。

この世には、泣いてしまうような事が

—あまりにも多いということだけ—

23人目『咳いた男』

リモコンを手に取り、電源ボタンを押す。

ピッ

テレビ画面に、2人の人間が映し出された。

どうやら1人がゲストで、残りの1人が司会で、40分ほどしゃべるトーク番組のようだ。

司会の女性が早口でしゃべる。

「そうですかそれは大変でしたわねえ。それでどうしたんです？ え？ まあまあそうなの？ それはちょっと違うんじゃないの？ そう？ まあそうですよね、そんな場面じゃ仕方ないわよねえ。ええ」

終始女性が一方的にしゃべり倒したあと、最後の最後でゲストに長い質問をした。

「それですね、今回のゲストの彼も小さい頃はこういう子供だったということですよねえ。それが今では世界的にも有名におなりになってねえ。ホントにすごい事だと思うんですけど。それでですね、あのちょっと質問なんですけどよろしい？ あのですね。どうしたらあなたみたいになれるのかしら。多分あなたみたいになりたいとかって思ってる人って大勢いると思うんですね。私も含めてなんですけど。ですからその人たちになにかアドバイスというかメッセージがあれば言ってあげて下さらない？ なんでもいいんでね。はい。お願いします」

彼は、彼女に負けなくらい長く答えた。

「どうすれば、私みたいになれるかということですけど。私がいつも心に刻んでる。根底にあるものがあって、それがどういのかっていうと、その、なんていうんでしょうか。その……。

—私のようになってほしくないんですよ—

ええ、そうなんですよ。

昔ね。

今とは違う道を歩いてたんですよ。

それはもう、まったく違う道を……。

好きなことが、あったんですよ。

ずっと、一生をそれに費やしてもいいと思えるくらいいたいたことがあったんです。

それをしてるとき、私は全ての事を忘れて没頭できるんです。

時間も空間も全てを捨て去り没頭出来ることなんてこれ以外にありません。

しかし、私は違う道を進んでいた。

苦しかった。

今、私がこうしていられるのは、ただ運が良かっただけです。

だから、みなさんには自分の本当に熱中できる道を歩いてほしい。

たとえば、今、違う道を歩いていたとしても、自分の進みたい道に移ってください。

違う道に移ることがすごい苦しいと思っても、進みたくないう道を歩くよりよっぽどマシです。

だから、まずは声に出してください。

思っている人も気づいてはくれません。

人は、自分以外の心の声を聞くことが出来ないから。

声に出せば、絶対に聞いてくれる人がいるから。

その人が、助けてくれるかもしれないから。

まずは、声に出してください。

それと、歩きたい道も、決して平坦な道ではないでしょう。

歩くことをやめたいと思うこともあるでしょう。

だけどそのときは、最初の気持ちを思い出してください。

初めの気持ちを忘れなければ、大丈夫ですから

私が言いたいのは

―自分に嘘をつかないで―

―自分を偽らないで―

―あきらめないで―

―あなたの人生は、他の誰でもない、あなたのためにあるんだから―

ピ

テレビ画面に自分の顔が映った。

―腰抜けめ―

24人目『風になった男』

大勢の人々は物音一つさせず、中央のコートを見ていた。

初めはあれほど熱く盛り上がっていたのに、今では誰もが息を飲み込んでいた。

人々は

――1人の男を見つめていた――

バスケットボールインターハイ決勝

第4クォーター。

残り3分。

コート上に

――風が現れた――

第4クォーター――

残り8分。

突如として彼の動きが鈍くなった。

彼は序盤から他を圧倒した動きを見せていた。

そんな彼を動かしていた何かが切れたようだった。

攻撃の要、彼が止まれば、チームが止まる。

監督は迷った。

代えの選手はいる。

だが、荷が重過ぎる。

勝つには彼しかない。

監督は続行を決意。

残り7分

しかし、彼の動きはなおも遅くなる。

残り6分

体中から汗が滝のように流れている。

残り5分

ゼエゼエとアゴをあげ、肩で息をする。

残り4分

こちらのシュートがはずれ、リバウンドを許した。

ディフェンスに戻る途中、彼は

―止まった―

コートで中央で前を向いたまま立ち尽くす。

ゼエゼエという呼吸がこちらまで聞こえてくる。

案の定、簡単にシュートを入れられた。

肩を上下におおきく揺らすだけで、他の部分は石造のように動かない。

彼に、チームメイトの一人が近づいた。

「おい、聞こえてるかあ？」

目だけが動きチームメイトを見る。

「おまえは今なにを考えてんだ？もう疲れて動きたくないとかか？
なんでここにいるんだとかか？あ？ったくよ。このままじゃどうなる？わかるだろ？おい。」

―負けちまうんだよ―

わかってんのか？それが、どういうことか」

男は、ボールを奪われ、再びシュートを決められそうになっているチームを見る。

そして、今までの道のりが頭をよぎる。

初めてボールのボツボツを触ったときの感触。

たった一人で手作りのゴールにシュートを決めていた夏の日。

島を出て、この学校にやってきた。

そこには、自分と同じ人間がたくさんいた。

どんなに苦しくても、どんなに辛くても、上手くなるためなら、勝つためなら乗り越えられる。

―バスケが好きだから―

それに

―もう一人じゃない―

たたずむ男に放物線を描きボールが近づく。

男がボールを見据えた。

次の瞬間。

―ボールは風に乗った―

疾風がコートの中に吹き荒れる。

風を止めようと5枚の壁が立ちふさがる。

しかし、風はいとも簡単にすり抜ける。

風はふわりとボールを持ち上げる。

そして、

―ゴールへ稲妻が落ちた―

会場は沸点に到達した。

観客は、その暴風に喚起の声をあげた。

しかし、徐々に観客は異変に気づき始めた。

息をしているのかしていないのかわからないほど風は静かに呼吸をし、大量に流れていた汗も一滴も見えない。

賛辞を送った観客も、今ではその風を恐れていた。

残り8秒

1点ビハインド

敵チームの攻撃。

敵チームはボールをとられなければ勝ち。

すなわち、ボールを奪わなければこちらの負け。

相手はボールを回す。

確実なボール回し。

――負ける――

残り2秒

どこからともなく

―神風が吹いた―

残り一秒

ボールは神風に乗り、放物線を描く。

ダンッ

ダンッ

ダンッ

ダンッ
ダンッ
ダンダンダンダン

ボールは、ネットに触れることなく地面に転がった。

大勢の人々は物音一つさせず、中央のコートを見ていた。

初めはあれほど熱く盛り上がっていたのに、今は誰もが息を飲み込んでいた。

人々は

――1人の男を見つめていた――

楽しい、おもしろい、好き、風を吹かせていたそれらの原動力を使い果たし、

センターサークルの中で、子供のように眠る男を。

25人目『落とした男』

ある日、自転車に乗っていると道の脇にある草むらで必死に地面を掻き分けている男の人がいた。

私は気になって自転車から降りて話しかけた。

「どうしたんですか？」

男の人は切羽詰った表情で答えた。

「落としてしまったのです。落としてしまったのです」

誰が見ても必死だということが伝わってくる。

「なにを落としてしまったんですか？」

「とても大事なもののなのです。私にとって、なくてはならないものののです」

「それは大変。私も探しますよ。それは一体どんな形ですか？どんな色ですか？」

すると男はいきなり黙り、止まってしまった。

「あの……。もしもし？」

男は焦点の合っていない目で一点を見つめながら言った。

「……わからない。どんな形だったか……どんな色だったか……覚えていないのです……。それは、あまりにも当たり前にそこにあって、絶対になくならないと思っていたものです。ですから、よく見ようともせず、大事に扱いもしなかった……」

「それじゃあ、見てわからないんだったら探しようがないんじゃない？」

「いや！！見ればわかるのです！！今は思い出せなくても、それを見れば必ず思い出すのです。そして、もう二度と忘れることはないのです！！」

「それなら、なぜそんな大事なものを落としてしまったんです？」

「私は知らなかったのです。これほどまで私にとって大切なものだったとは。失って、離れてみて初めてその大切さがわかったのです。しかし、

――気づくのが、遅すぎました――

近くにあったとき、当たり前だったとき、

――なぜもっと大事にしなかったのか――

ただただ、今は後悔するしかないのです」

「だけど、そのときは知らなかったんですから。これから気をつければいいじゃないですか」

「違うのです。ホントに知らなかったのなら、こんなに後悔してい

ないでしょう。私は

—知っていたのです—

心の隅っこでは思っていたのです。

大事にしなくてはいけないと。

離してはいけないと。

しかし……私は……」

男の人は背中を丸くして落ち込んでいる。

「さあ、早く探しましょう。そんなに大事なものならなおさらですよ」

「ありがとうございます。早く探……」

「ど、どうしました？」

「……そ、それは……」

男の人は、目を丸くさせながら私を指した。

「これですか？これがどうかしたんですか？」

「……それなのです……それなのです！！私が落としたのはっ！！」

「えっ！？これですか！？本当にこれですか？こんな当たり前で、どこにでもあるようなものがそうなんですか？」

「お願いです！！どうかそれを私に分けてくれませんか！？このとおりです！！お願いします！！」

「本当にこれですか？これは私がずっと前から持っていたもので、あなたが持っていたものとは違うと思うんですけど」

「いいえ。それでいいのです。だから、お願いです。分けてください！！！」

「ホントにこれでいいのでしたらどうぞ。もし良かったら全部あげてもかまいませんが」

「何を言っているのですか。あなたはまだ気づいていないのです。それがどんなに大切か。どんなに自分に必要なものか。この世で一番大切なものなのです！！」

「本当ですか？私にはよくわかりません」

「失くしたときに気づくのです。しかし、こんなに辛いことはないのです。ですから、あなたには失くして欲しくないのです。落として欲しくないのです。どうか、大事に大事にしてくださいきたいのです」

「わかりました。それではどうぞ」

私は大事に大事にそれを手渡した。

男の人は、それは嬉しそうに受け取って、

「ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。」

と、この世で最も美しい言葉を何回も言った。

「このご恩は一生忘れません。何かお礼をさせてください。なんでもさせて頂きます」

「いえ、お構いなく。私はもう、お礼を貰いましたから」

自転車に乗りながら思う。

こんなに人に感謝された事があっただろうか。

こんなに人に頼られたことがあっただろうか。

私は、今まで感じたことのない幸福感に満たされていた。

あの人が言っていたように、私はこれを一生大事に大事にすることでしょう。

だってこれは当たり前で、ごく自然に誰もが持っているものだけど、

――最高の幸せをもたらしてくれるから――

26人目『わかり合う男』

何でボクがこんなところにいるかって？

それはね、パパとママがとってもアウトドア派なんだよ。

週末には山に海にボクをつれてくんだ。

ボクはね、別に嫌いなわけじゃないよ。

だけどさ、こういうのは時々いくのが良くってさ、そんなちよくちよく行かれてもボクは飽きちゃったんだよね。

って、ボクが言っちゃったんだよ。

それがいけないかった。

「それなら、初めて行く所に行こう!!」

って、張り切っちゃったんだ。

こうして、今ボクはジャングルにいるわけ。

それにしても……。

ガクンッ

「道でこぼこすぎ!! 尻痛いから!! アザ出来ちゃうって!!」

「あっはっはっは、この揺れがいいじゃないか。日本じゃこの揺れは体験できないぞ?」

にこやかにお父さんが言った。

「揺れなんてどこも一緒だって!!」

「でもよかったじゃない。まだ蒙古斑があるからアザが出来てもわからないわよ」

にこやかにお母さんが言った。

「見分けがつかなくてもアザだったら痛いでしょうが!!そこが問題なんだから!!見た目の問題じゃないし。ってか誰かに見せるわけないだろ!!」

ボクはプンスカ怒っていた。

「ヘイ、ボーイ!!」

鉄砲を持ったガイドの人が話しかけてきた。

「ルックルック!!」

指をさしているところからすると、見ろってことかな?

「ビッグバード」

「いや、どうみても飛行機ですから!!子供だからって騙されませーん!!どうせならもっと気の利いたこと言って」

ボクが言ったことをお父さんが訳してガイドに伝える。

ガイドがなにやら言って遠い目で外を見る。

お父さんがいう。

「今のが彼の……ベストだ」

その後、揺れるジープの中で言葉が交わされることはなかった。

本日のキャンプ地に到着。

「いやゝやっぱり空気が違うなあ空気が」

「それ何回目？ そんなにころころ空気が違ってたら困るでしょうよ」

そう言ってジープから降りる。

どこからともなく鳥の声が聞こえてくる。

今まで見たこともないくらい深い緑色の世界が広がっている。

お父さんにはああ言ったけど、確かに空気が濃い感じがした。

深くて濃い、地上なのに深海みたいだ。

「ここが今日泊まる家ねえ。やっぱり小さいわねえ」

お母さんが見ていた木のドアには“W・C”と書いてあった。

レストランで見たことがある。

トイレって意味だ。

屋根もないし寝っころがれないほど小さい。

ボクは何も言わずに上を見る。

「……まぶしいな……」

緑の空には星が輝いている。

さてと、今日泊まるのは木で出来た丸太小屋だ。

まだ夕食まで時間があるから荷物を置いてみんなで近くを散策することにした。

あらためて歩いてわかったことは、全然静かじゃないってこと。

騒がしいって言ったほうがいいかもしれない。

猿もウキーウキー言ってるし相変わらずトリもピーピー言ってるし虫もブーンって飛んでるし。

「やっぱり空気が違うなあ。ほら、胸いっぱい空気を吸い込んで

みろ」

フリー

「んぐっ!! ブフッ!! ンー!! 鼻に!! 虫が!!」

相変わらずお父さんは暑苦しいし。

「大丈夫? 気をつけなくちゃ。ハナには虫が寄ってくるものだから」

「植物の花には寄って来るけど人間の鼻には寄ってこないって。鼻に入っちゃったのはお父さんの吸引力が強かっただけ!!」

お母さんも相変わらずだし……。

「ヘイ、ボーイッ」

「はい?」

すごい笑顔で採った虫を見せてきた。

「ビードル」

「へえ、カナブンってこの言葉だとビードルっていうんだ」

するとお父さんがすかさず会話に入ってきた。

「いや、ビードルとはカブトムシのことだぞ」

「え? でもこれはカナブンじゃ……あ、そうか。カブトのメスと間

「違えたのか!？」

父がそれはカナブンですよと話すと、さっきまでの笑顔が一気になくなり、どこか寂しげな表情でカナブンをもといた木に戻っていた。

「ハア……もう……帰りたい……」

肩を落として森の奥を見ていたら、何かがすーって動いたんだ。

サルかな？

ボクはそう思って奥のほうへ行っただ。

そこで僕が見たのは、サルなんかじゃなかった。

ヒトだった。

「こうして、今ボクはジャングルにいるわけ。それにしても……」

彼はさっきから何も言わないでボクの話聞いている。

彼は一言もしゃべらない。

本当にボクの言ってる言葉を理解してるのかなあ。

だけど、彼の目を見たらボクのそんな心配は吹き飛んだ。

「お父さんはボクの事を何にもわかってないんだ。僕の気持ちくら

い理解してほしいよね。それにお母さんはお母さんで何考えてるのかさっぱりわかんない。それにガイドさんの言葉もよくわかんなくてその上なんかいろいろ間違えるかしさあホントに大丈夫？って心配しちゃうよねえ。だからさ、誰もボクのことなんてわかってくれないんじゃないかなって思ってるんだ」

―誰かと理解しあうことなんて、出来ないんじゃないのかな―

そう言うと、今まで隣に座って聞いていた彼が静かに立った前へ歩いていった。

薄暗い森の中でその場所だけ光が射していた。

まるで、森が創ってくれた彼だけの場所みたいだ。

そこまで行くと、彼は左腕を肩の高さまで持ち上げた。

すると、どこからともなくカラフルな鳥達が腕に止まって美しい歌を囀り、大きな蝶がゆらゆらと飛んできた。

隣の木から小さなサル達がやってくると体を登って追いかけてこ。

足元から芽が生えて、綺麗な花を咲かす。

茂みからヒョウが出てきて、ゴロゴロと喉を鳴らしてネコみたいに首をこすりつける。

そして、生い茂る葉っぱで出来たカーテンの向こうから大きな体の

ゾウがのっそりと現れて、彼は右手でやさしく鼻をさすりながら、ボクのほうを優しい瞳で見ながら言ったんだ。

僕達はね

―わかりあえないことなんてないんだよ―

27人目『思った男』 28人目『里帰りした男』 (前書き)

1話600文字以下だったため2話同時掲載

27人目『思った男』

28人目『里帰りした男』

27人目『思った男』

すー

すー

すー

午後の授業中に教室の後のほうで寝息を立てる男。

ビクッ

ガタンッ!!

「イタッ!!」

いきなり大きな音がしたもんだから先生もおどろいたようで。

「なんだっ?!びっくりした!!なんだよもうびっくりしたなあ。
寝るにしても起きるにしても静かにしてくれ」

「あ、すみません」

そんなやりとりに笑いが漏れた。

クスクスクス

そして隣の席の男が話しかける。

「なあにやってんだよ。落ちた夢でも見たか？」

「あー……シュート決めた」

「あっはっはそうかそうか。そりゃ良かった」

ボケー

起きた後もノートを取ることもなくただボーっと前を向いている。

それを見兼ねて隣の席の男がまた声をかけた。

「おい。なにボケーっとしてんだよ。ノートとれ。見せてやらんぞ」

男はまだボーっとしながら答えた。

「いやー……なんてえか……」

――しあわせだなあって思ってた――

「……そりゃ良かった」

幸せをかみ締める時なんてのは、何の変哲もない、何でもないふとした瞬間なんだ

28人目『里帰りした男』

山に囲まれた村にある一軒の家。

その縁側。

風鈴が綺麗な音色を独特のリズムで奏で、遠くのほうから川のせせらぎも静かに加わる。

セミがその伴奏に合わせて合唱する。

蚊取り線香の香りを出す豚の置物と、綺麗にスイカの皮だけ残した皿の隣。

気持ちよさそうに眠る男と、その隣で同じようにすやすや眠る子供。

白くもこもことした雲と、燦々と輝く太陽の日差しが二人を照らす。

川で冷やされた心地よい風がそよそよ吹き、すれ違い様に火照った体を冷ましてゆく。

相変わらず空は優しく包み込む。

夜、満天の星空。

「もっと近くで見たい」

二人は昼間とは違う虫の音色を楽しみながら山を登る。

「うわゝ」

そこからは、街が一望できた。

「ボク達って星屑の中に住んでたんだね」

男はペットボトルを取り出して子供に渡した。

子供は空にかざして中を覗き込んだ。

そしてふたを開けて中の水をゴクゴク飲んだ。

「すごいやつ。ボク、お星様飲んじやった!!」

そのせいかどうかわからない

しかし、子供の目はキラキラと輝やいていた。

29人目『発明した男』

「……出来た……とうとう出来たぞ!! これで俺は、億万長者だああああああああああ!!!!!!」

その後、高笑いを延々1時間ほどしたのち、隣の家から苦情が来てペコペコ謝っているこの男。

いわゆる一つの発明家という職種の人だ。

特に彼は薬の分野が強いようで、今までにもいくつか発明しているらしい。

しかし、最近は一つも新しい薬を発表していなかった。

それはなぜかという、ある一つの薬を黙々と作り続けていたからだ。

そして、それがやっとこさ完成を見たというわけだ。

男はすぐに知り合いの製薬会社に電話をした。

会社側はその薬の効能を聞くとすぐに大量生産を開始した。

こんな画期的な薬が売れないわけがないと踏んだわけだ。

そして、その薬は大々的に宣伝される事になったが、この薬には一つの問題点があった。

それは、「どんな副作用があるのか判明していない」と、いうことである。

それでも大量生産したのはそれ以上に効能が魅力的だったからだ。

効能

― 勇気が持てる ―

この薬を服用すればたちまち勇気が湧いて来るのだ。

これほど便利な薬はない。

人生で一番必要なものは勇気なのだ。

一歩踏み出す勇気。

これがあるのとないのとは天と地ほどの差がある。

誰もがこの薬を欲しがるに違いない。

しかし、発売からしばらくたって、薬はさっぱり売れなかった。

当たり前だ。

勇気を持っている人は買わないし、勇気がない人は副作用が怖くて

飲めないのだ。

結局、勇気というのは

―他から得られるものではないということだ―

30人目『泣いている男2』

男は泣いていた。

なぜ泣いているのか。

―その理由はわからない―

思いもよらない幸運が舞い降りたのかもしれない。

今までしてきた努力が実を結んだのかもしれない。

永遠とも思える長い長い苦しみとプレッシャーを栄光と賛美に変えたのかもしれない。

今まで人生を否定され、自分でも生きてはいけなさと考えていたのに、些細なことがきっかけで生きててもいいと実感したのかもしれない。

男は泣いている

―その理由はわからない―

朝日がとても美しかったのかもしれない。

晴天に降った雨粒がキラキラ輝いて、まるで光の粒が降ってるみた

いだったのかもしれない。

雨上がりに架かった虹が、あまりにも荘厳だったのかもしれない。

何日も雨が降り、人間も動物も植物も凍えていたとき、雲の隙間から光が差し込み、今まで忘れていた太陽の暖かさを知ったからかもしれない。

目が覚めて、一番最初にしゃべった人がいつもと同じように、この世で一番愛してる人だったのかもしれない。

この世で最も尊い存在が、いつものように笑っているからかもしれない。

笑いすぎたのかもしれない。

うれしすぎたのかもしれない。

幸せすぎたのかもしれない。

男は涙を流す。

—その理由はわからない—

それはほんの小さな、ささいなことなのかもしれない。

朝、目が覚めたからかもしれない。

今、生きているからかもしれない。

どこかで新しい命が誕生したのかもしれない。

なぜ男が泣いているのか。

―その理由はわからない―

みんなから無理だ無理だと言われたことを、とうとう成し遂げたのかもしれない。

辛く過酷な旅路の果てに、世界に平和をもたらしたのかもしれない。

思わず拳を握り、雄たけびを上げたくなるようなことをやって見せたのかもしれない。

さんざん迷い苦しみ、必死で探し歩き続けた先に、魂をゆさぶられる光景が待っていたのかもしれない。

ただ、一つわかっていることは。

この世には、泣いてしまうような事が

―あまりにも多いということだけ―

31人目『賭けた男』

俺はギャンブラー。

賭け事ならなんでもしてきた。

パチンコにスロット、競馬に競輪、そして競艇。

そんなどこにでもいるお父さん方がやってることなんて10代の頃にすでに卒業してたさ。

もっと大きな、そして危険な賭けをして来たんだ。

金だけじゃない。

物だって人だって賭けてきた。

だが俺は

—命だけは賭けなかった—

自分の命。

これだけは賭けなかった。

そこが俺の悪いところかもしれない。

だから俺は、食いつぱぐれもしないけど一生遊んでもいけない微妙な位置にいるんだろうな。

「さあ、あなたはどれに賭けますか」

俺の番か……ここは無難に賭けとくか。

「これで、よろしいですね」

勝てば当分は好きに暮らせるな。

負けても命をとられることはないんだ。

またイチからやり直し、いや、賭け直せばいい。

「さあみなさん。今回は特別サービスタイムになります」

ん？

なんだそれ。

「勝てば今までの倍率の100倍になります」

マジかよ。

やばいな……。

「しかし……負ければ同じように賭けた100倍没収します」

しまったな……。

「もちろん。支払えないのであれば、あなた自身で支払ってもらう

事になるでしょう」

「ちょ、ちょっと！！それ、一体どうしたことよ！？」

ほう、抗議するやつがいたか。

無駄なことだ。

俺らギャンブラーは、ホスト側の遊び道具でしかないんだからな。

「もちろん。アナタの命……ということです」

「そ、そんなのダメダメ！！ナシナシ！！降ります！！」

「それは出来ません。それでは初めます」

当たり前だ。

賭けてから降りるなんてタブー中のタブーだ。

そんなのも知らないのかこの女は。

そんなことより……頼むぜ！！

「お願いお願いお願い」

「やったよ……やったよ……ついにやったぜ……」

— やっちまったぜ —

終わっちまうのか……。

「うそ……そんな……」

あの女もダメだったか……。

やっぱり

— 命なんて賭けるもんじゃねえな —

「さあ、敗者の皆さん。こちらへ」

「嫌よ……」

ん？

「こんなの絶対イヤ!!」

「いいからこっちへ来い!!」

「まだ死にたくない!! 死んでられるか!!」

……たしかに……そうだな……。

―死なないために、命賭けますか―

「うっ!! うええええ!!」

「なんだ? そんなに死ぬのが怖いか? それとも悪いもんでも食ったか? ケツケツケ」

「……正解」

「なっ手榴だっ」

カチッ

ドガン!!

「逃げるぞ!! 走れ!!」

「えっ!!? あっ!! ちょ!!」

数年後

もう賭け事なんてコリゴリだ。

そう思ってた。

だけど……。

やっぱりこれが俺の性なのかもしれないな。

—この子の幸せのために、俺の命を賭けよう—

我が子を抱きあげながら言った。

32人目『見兼ねた男』

目の前に突きつけられた仕事を見て考える。

―俺のすべきことはこんなことじゃない―

俺にはもっとやらなくちゃいけないことがあるんだ。

こんなことしても、無駄だ。

こうして俺は

―目の前の仕事に背を向けた―

そして、しばらくして気がついた。

―俺のすべきことってなんだろう―

そして、いつものように今日が終わる。

そんな日々が続いていた。

そんな俺を見兼ねて話しかけてくる男がいた。

「なぜキミは仕事に背を向けているのかね？」

「俺のすることは、こんなことじゃないからです」

「そうか。それじゃあもう一つ質問があるんだが」

彼は目を鋭くさせて俺に質問した。

「キミのすべきこととは、そうやって何もしないことなのかい？」

彼の質問は、核心を貫いた。

俺は、矛盾していることに気づきながらも答えた。

「……違います」

「キミはおかしなことを言ってるね。目の前にある仕事はキミのやるべきことじゃない。だから仕事をしない。だからキミは今すべきことをやってなきゃおかしい。だけど、今キミのしていることもすべきことじゃない。これは、ようするにだ」

—キミは逃げてるだけだ—

俺は泣きそうだった。

身包みを剥ぎ取られ、真っ裸にされた気分だったからだ。

「やるべき事を考えるなどと言わないよ。理想を追うなどとも言わないし夢を見るなどと言わない。だけどね、そういうことを、

―逃げる理由にだけはして欲しくないんだ―

今しなくちゃいけないことなんて、そのときは気づかないんだよ。過ぎ去ってから気づくんだ。

―なんであの時しなかったんだ―

って。気づいたらすればいいんだよ。その時までは目の前に与えられた事を懸命にすればいい。どんなことでも

―力を尽くしてしたことは、自分の糧になるから―

一見、逃げるってことはとても楽に見えるけど、実際すごく辛いもんだよね」

俺はいつしか泣いていた。

涙をぬぐって周りを見渡すと、すでにそこに男はいなかった。

あるのは、背を向けた仕事だけ。

俺は、仕事と向かい合う。

―目の前のことをしないで、その先にいけるはずがない―

33人目『自分ひとりではどうすることも出来ない男』

仕事の疲れを癒すために一人で海外旅行に来た。

いや〜。

やっぱりいいもんだ。

仕事仕事でずっとまともな休みを取れてなかったからなあ。

透き通る珊瑚礁の海。

ていうか、この島がすでに珊瑚礁なんだよな。

小さい島だから、今日中に一周できそうだ。

「あんたあ、観光客かい？」

島の人が訪ねてきた。

「ええ、そうですよ。ここは本当にいいところですね。気に入りました。ここに住みたいくらいですよ」

私がそういうと、彼は少々寂しそうな顔をしながら言った。

「それは嬉しいことだが、多分あんたも住むのがイヤになるだろうよ」

私の予想外の答えが返ってきた。

「なんでですか？こんなに素晴らしいところなのに」

そう聞くと、おじいさんは目を細めながら言った。

「もうすぐわかるじやろうに」

私はなぜそんなことを言うのか考えていた。

こんないい所がイヤになるって？

イヤなところなんて一つもない。

どうすれば嫌いになれるか教えて欲しいものだ。

しかし、私はすぐにおじいさんの言葉の意図を知ることになる。

私がしばらく立ったまま考え、そして再び歩き出そうとしたときだ。

眼の前の地面から、水が染み出て来るではないか。

雨なんか降ってないし、地震とかで液状化現象が起きたわけでもない。

いきなりコンクリートの地面から水が出てきたのだ。

私が驚いているとおじいさんが言った。

「この時期、満潮になるとああやって島中から海水が湧き出てくるんじゃないよ。しかも年々湧き始める時間が早くなってきたおる。湧き

出す海水の量も増えとる」

そんなことがあるのか。

私は耳を疑った。

しかし、現実に関の前で水が湧き出ていることは確かだ。

「一体なぜこんなことがおきてしまうんですか？」

おじいさんの言ったその一言で、私は全てを受け入れることが出来た。

「温暖化じゃよ」

温暖化による海面上昇。

それが原因。

おじいさんは続けて答えた。

「ある国のTV番組がやってきて言ったよ。ここは“世界で一番最初に沈む国だ”とね。ワシらにそんなことを言っで一体どうしたいのか。我々は何もしとらんじゃ。毎日、島と海から少しだけめぐみを貰い、そのことを、生きていることを神に感謝しているだけだ。それなのに、なぜ沈むんじゃ？ワシらが何か悪いことをしたというのか？誰がこんな目にあわせるんじゃ？誰がワシらを恨んでるんじゃ？誰が陥れようとしとるんじゃ？もし、悪気がないというのなら、わしらは、一体どうすればいいんじゃ？」

私は、何も答えることが出来なかった。

満潮を迎えると、1 m 5 0 c mの高床に建てられた家も床上浸水になった。

その後、徐々に水は引いていったが、次にはもっと多くの海水があふれ出すことだろう。

帰りの飛行機の窓から島を見る。

世界で一番最初に海に沈む国。

今回の旅で、改めて気づかされたことがあった。

どんなに大きくても、どんなに呼ばれる名前が違ってても、

—海は一つなんだ—

—地球は一つなんだ—

どこかがゆがんで、それを平らにしても、必ず違うどこかがゆがむんだ。

どんどん小さくなり、海のなかに消えた島を見ながら心に思うことがあった。

—この島に住んでいる人々は、一体どうなるんだ—

34人目『大コウカイした男』

どのくらい経ったんだろう。

もう夜を数えるのはやめてしまった。

自分の甘さがとことんわかった。

―海って、こんなに大きかったんだ―

誰もボクの事を知らない世界に行きたかったんだ。

ただ、それだけ。

逃げ場所はまだ、海しかなかったんだ。

よかったことといえば、魚が釣れまくるって事。

悪かったことといえば、水が飲めないって事。

ボクと同じで、海の水が甘ければよかったのにな。

―今日も帰っちゃうの?―

「また明日」

夕日がまた海の中へ帰っていった。

そういえば、太陽は燃えてるって聞いたな。

だから海の中へ入って火を消すのか。

確かに一日中燃えてたら熱くて仕方ないもんね。

また夜が来た。

海に出るまで気がつかなかったけど

――夜ってすごい眩しい――

海に夜が反射してどこもかしこも星だらけ。

それと太陽みたいにギラギラと光る月。

太陽が月じゃないってことぐらい知ってるよ。

だって、太陽はちゃんと海の中にあるんだから。

ほら、揺れてるけどちゃんとあるでしょ？

ん？

ちょっと待ってよ。

光ってるつことは火が消えてないじゃん!!

こんなにたくさん水でも消えないのか。

すごいなあ太陽って。

また海から太陽が出て来た。

ボクの頬が光ってるって？

別に泣いてなんかいないよ。

ただ

――涙を流してるだけだい――

嘘じゃないぞ。

ちよつと涙を流そうと思っただけだい。

別に帰りたいなんて思っただけだよ。

淋しいわけじゃないって。

ホントだって。

ほんと……。

—そんなに見るなよ—

太陽はボクを見続ける。

いつものように魚を釣る。

「あ、島だ」

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

やったああああああああ！！！！！！！！！！

これでやっと水が飲める！！！！

布団で寝れる！！！！！！

人としやべれるぞおおおおお！！！！！！！！

あっはっはっはっはっ！！！！

港が見えてきたぞ。

あれ？

なんか見たことある建物があるなあ。

ん？

なんか人がわらわら集まってきて……。

ああ……そうだった……。

―地球って丸いんだっけ―

ゴチンッ

「まったくバカなんだから！！これじゃあみんなに恥を大公開した
ようなもんじゃないか！！」

「たしかに見せてもらったぞ。大航海だったじゃないか」

「褒めないでちょうだい!! すぐ調子に乗るんだから」

「えへへへへ」

「ほらっ、笑わない!!」

「うゝゝ」

「ったく……心配したんだから」

— おかえり —

— ただいま —

お母さんを抱きしめながら思った。

涙を流して大後悔したことは、黙っておこうっと。

35人目『越える男』

「もう、やめようと思ってるんだ」

「はあっ!？」

こいつが突拍子もない事を言うもんだから必要以上のリアクションをしちまったじゃねえか。

「やめるって何をやめんだよ」

まあいつものように禁酒でも宣言すんのか？　そんで2分後にはグイッと飲んでんだろうな。

「引退しようと思う」

「はあっ!？　なにを言ってるんだおめえは!？」

こいつの考えてることはわかった試しがないが今回ほど理解したいことも初めてだ。

「なんでだ？　理由を言わんことには何も言えんぞ」

“やめようと思ってる”って俺に相談したってことは、まだこいつは迷ってるってことだよな。まずは一体こいつが何を考えてるかわからんことにはどうもこうもしようがあるめえ。

「なんていうか……こう決められて……いろいろさ……好きに指して……まあ、だから……かな」

まったくもって理解不能だ。世界最高のスーパーコンピュータを持ってしてもこいつの言った事を解読することは出来ないだろう。ってか俺に意見を求めてる時点でこいつは本当は引退なんてしたくないはずなんだ。

本当にやめたいんだったらさっさとやめてるっての。こいつは昔からそうなんだ。人の意見なんて聞くヤツじゃない。まったく世話が焼ける。ようはこいつ。やめる理由じゃなくて、

――続ける理由がわかってないんじゃないかねえのか？――

それじゃあなんだ？ 俺はなんて言えбайいいんだ？ うゝん。こいつは俺に何て言って欲しいんだ？ ああもう。なんで俺はこいつのことでいつも悩まなきやならねえんだ。考えさせられっぱなしじやねえかよ。まったく

—こいつはいつも俺の想像を超えていく—

その度に俺は悩んでは考える。だけど、

—追いつけたことなんて一度もなかった—

よし、もう考えるのはよそう。こいつに考えなんてモノ通じねえんだから。口から出てくる素直な言葉を信じよう。

「……例えばだ。お前の指したその一手。対戦相手含めその対局を見ていた全ての人々がお前の敗北を確信したとする。対戦相手は悠々と対局を進めていく。お前も当たり前のように駒を指す。すると、次の一手を置こうと差し出した対戦相手の手が突如震えだす。平然と指したお前の一手が、

—その場にいた全員の想像を超越したんだ—

お前は別に驚かない。なぜなら、全員が敗北を確信したときから、お前は

—勝利を確信していたから—

どうだ？

—人の想像を超える以上の喜びなんてこの世に存在しねえんだよ—

……うゝん。はつきり言って自分でも何言ってるかよくわからなかったなあ……。でもまあ、大丈夫みたいだな。

パチンッ

あいつの目が、早く次の一手を指せと俺に訴えかける。いいだろう。やってやろうじゃないか。お前の想像なんて、

——軽く飛び越えてやる——

パチンッ

36人目 『どうしても言いたかったことを爆発させる男』

37人目 『夢を見

1話600文字以下のため2話同時掲載

36人目『どうしても言いたかったことを爆発させる男』

37人目『夢を見ち

36人目『どうしても言いたかった事を爆発させる男』

ああもう!!

一体なんなんだよあんたらは!!

俺をどうするつもりなんだ!?

そんなに世間って厳しいところなのかよ!!

そんなに社会って怖いところなのかよ!!

俺を怯えさせてどうするつもりだ!!!!

俺を脅してなんの得になる!?

そんな世界に何の魅力があるんだ!?

どうすればそんな世界に希望が持てるんだ!?

なんでそんなに夢を踏み潰すようなことしか言えねえんだよ!!

そんなに生きるってのは苦しいことなのかよ!!

じゃあ何で生きてなきゃなんないんだよ!!

生きる意味ってなんだよ!!

本当に言って欲しい事なんて一つも言っちゃくれない!!

耳を塞ぎたくなるような事を大声でばら撒きやがる!!

みんなそんな人間になっちゃうのかよ!!

俺もあんたみたいな人間になっちゃうのかよ!!

夢を奪っちゃうような人間によ!!

もう決めた!!

もうあんたらの言ってることなんて聞いてられるか!!
誰がなんと言おうが俺には関係ねえ!!

なんだよ!!!

まだ俺に何か言うつもりか!?

うるせえ!!

『好きに生きて何が悪い!!!

たった一度の人生だ!!!』

37人目『夢を見た男』

夢を見たよ。

絶対に叶わない夢を。

あなたが隣で幸せそうに眠ってる夢を。

あなたがいたこの世界が

好きで好きでしかたがなかったんです。

あなたがなくなった今も

この世界を愛しているんです。

あなたがいた明日には

夢と希望と可能性があったんです。

あなたがなくなった今も

明日には夢も希望も可能性も満ち溢れているんです。

あなたがいたときの僕の夢にはあなたがいました。

あなたがなくなった今も

僕の夢には

あなたがいます。

38人目『雨男』

降水確率0%の蒸し暑い夏の日。雲ひとつない青空でも、この男には関係ない。

この男が一步外に出ればどこからともなく積乱雲がもくもくと立ちこめ、ギンギンの太陽を覆い隠し、薄暗い世界にしてしまう。

そして、まるでジャングルのスクールのごとく豪雨を降らすのだ。今日もまた、男が外へ出かけようとしている。もちろん傘を忘れることはない。男も自分の性格?を十分承知している。

ガチャ

ゴロゴロゴロ

案の定、雷雲が現れてセミのミンミンという音に変わってザーザーという音があたりを包む。

晴天から一変しての大雨。

洗濯物を出したまま出かけていった人のことを考えれば少し胸が痛むが、男は言う。

「まあ、そんな日もあるさ」

自分はちゃんとふとんや洗濯物を家に入れているが、そんなことは気にしない。人生何があるかわからないもんだ。

男は大雨の中を傘を差して歩く。しかし、他の人は傘なんて持っていないからビショビショになりながら走っていたり、雨宿りをして困っている。そんな人たちを見ると少し胸が痛むが、男は言う。

「雨に打たれるのもいいもんさ」

自分は傘を差しているが、そんなことは関係ない。人生晴天ばかりじゃないもんだ。雨には打たれておいたほうがいい。そして、それを楽しむのも一つの手だ。

そうこうしているうちに男は買い物を済ませ家へと帰る。しかし、さっき来た道ではなく、見晴らしのいい公園へとやってきた。

なぜなら男は十分に自分の特性？に気づいているから、どのくらいで雨が上がるのか十分承知しているというわけだ。

ほら、雨脚が一気に遅くなって雨が止んだみたいだ。するとどうだろう。目の前に広がっていた薄暗い雲の隙間から、太陽光が我先にと飛び出して来た。

ゆっくりと動く空模様をじゅくりと見ながら男は言う。

「いきなりの大雨が降ったっていいじゃないか。こんな景色が見れるんだから」

実際この景色を見ている人がどのくらいいるかわからないが、そんな事この際どうでもいい。

一生続くような晴天が、突如として大雨に変わる。大雨は一生続くんじゃないかと思ってしまうほど激しく降る。しかし、一生晴天が続くことがないように、一生大雨が続くこともない。

大抵、身震いするような光景ってのは、そんな大雨の後に待っているもんだ。

39人目『もう会えないと悟った男』

ピロリロリン

ピロリロリン

ピッ

「もしもし」

「やあ、夜遅くに済まないね」

「いえいえ、そんなことないですよ。でも、こんな時間に電話だなんて、なんだか最後の別れを伝えるみたいですね」

「まさか、そんなこと……あるはずないだろう……」

「そうですね。それにしても久しぶりですね。こうやって話をするのは。元気になりましたか」

「ん？まあそうだな。元気になっていたよ」

「そうですね。それで、なにか急用でもあったんですか？」

「いやあ、そういうわけじゃないんだがね。ただ、ちょっと話がしたくてね」

「そうですね。僕も話たいと思ってたんですよ。電話じゃなくて会って話したいなあ。いつならいいですか？家に行きますよ」

「いやいや、そんなことなくていい。君も最近は忙しそうだからね」

「そんなことありませんって。あなたに比べたらまだまだヒヨツ子ですから」

「そんなことはない。キミは実力も十分付いてきているよ。教えることはもうないと言ってしまっただいいくらいだ。ただ……」

「ただ、なんです？」

「……ただ、キミに言い残したことがあるんだ。そのために電話をしたんだ。それを聞いて欲しい」

「……はい」

「キミは優しすぎる。そんなに周りの人のことばかり考えなくていい。自分をないがしろにしすぎだ」

「はい」

「自分をもっと、大切にしたい」

「はい」

「それと、キミはこの前、変わりたくなかったね」

「はい」

「現状に満足しちゃいけない。この世に変わらないものなんてない」

んだから。常にいいほうへ変わるように努力しなくてはいけない」

「はい」

「キミは、一生懸命何かをしている姿を人に見せるのが恥ずかしい
とと思っているみたいだが、それは間違っている。熱中している自分
を見せてやればいい。見せつけてやればいい。もしも、その姿を見
て笑われたのなら、私が絶対にゆるさない」

「はい」

「真剣になって何が悪い。たった一度の人生だ」

「はい」

「言いたかったのは……こういうことだ……」

「はい」

「それじゃあ……さよなら」

「あの……」

「ん？なんだい？」

「その………ありがとうございました」

「……こちらこそ………ありがとう……」

「……さよなら」

「さよなら」

ピー

ピー

ピー

ピー

40人目『広げた男』

俺の不注意だった。

疲れてたんだ。大学が終わってすぐにバイトへ行って、帰ってきたらすぐに飯を食べて風呂に入って。

もうフラフラしながら部屋に入ってエサをやって、窓を開けて月を見て。

その日は夜風が気持ちくて、綺麗な三日月だった。俺はうとうとし始めて、そのまま眠ってしまった。エサをやって、鍵をかけ忘れていたことに気づかないまま。

翌朝、いつものように鳴き声が聞こえないことに気づいて目が覚めたときには遅かった。すでにカゴの中にはいなかったんだ。

俺とキミとをつないでいた子鳥が。

弱々しい子鳥の鳴き声がしてたっけ。俺が見つけたんだけど、どうしていいか分からなくなってたときにキミが現れて、すぐに家へ連れて行っただけ。

キミは一人じゃ育てられないからって無理矢理俺にも手伝わせて、結局二人で世話をしたっけ。

小鳥が元気になったから大空に逃がしてあげたっけ。それで俺とキミとの関係も終わるはずだった。だけど、小鳥は僕とキミの家を行ったり来たりしてたことに気づいたんだ。

そんなある日、いつものように小鳥が窓を叩いたから開けると、足に紙がくくり付けられてて、それは、キミからの手紙で、俺もキミに手紙を書いて足に付けたっけ。

いつしか小鳥は、俺とキミとをつなぐ架け橋になってたんだ。

その日、キミは遠くへ行ってしまうと俺に告げた。

キミはまだ何か言いたげだったけど、俺はもう、何がなんだかわ

かんなくなつてその場から逃げ出した。

そして、キミからの最後の手紙を持って小鳥がやってきた。

―俺は返事を書けなかった―

そしてキミは遠くへ行ってしまった。

そんな俺とキミとをつないでいた小鳥を逃がしてしまった。
これで二度目だ。

大事なモノが遠くへ行ってしまったて泣いたのは。

トントン

あれから数日経っていた。俺は急いで窓を開ける。

そこには足に手紙を付けた小鳥が。

手紙は、最後にもらった手紙と一字一句、涙のシミまで一緒だった。

俺は、たった3文字の言葉だけを書いて、小鳥の足に付けた。

小鳥は大空へと飛び立った。

山を越え、海を越え、小鳥は俺の思いを乗せていく。

トントン

ガラガラガラ

ポタポタと涙が落ちる音がする。

ピンポーン

涙をぬぐい、鼻をすすする音がする。

ガチャ

そこには

――男が立っていた――

しばらく沈黙したのあと

――男が女を抱きしめた――

小鳥が二人をつなぎとめるのはもうおしまい。

男はすでに

――大きな大きな翼を広げたのだから――

41人目『受け継いだ男』

燃え盛る炎と、瓦礫が散乱する先ほどまで都市であっただろう場所に、一人の少年がボロボロの服を着て立っている。

少年は暑さも忘れ、恐怖も忘れ、考えることを忘れ、呆然と立ち尽くし、街を破壊し続けるモンスターを見続ける。

モンスターは逃げ惑う人々を、まるでホコリをはたくように蹴散らしてゆく。

どこからもとなく戦闘機が轟音を立てて頭上を通過し、ミサイルを撃ち込んだ。

少年は知っている。

それは効かない。

さっきから何発撃ち込んだことだろう。

何機撃墜されたことだろう。

ミサイルはモンスターにぶつかると激しくひかり黒い煙を出す。

黒い煙の向こうからモンスターが攻撃。

戦闘機は落ち葉のように地面に墜落した。

「無駄だ……」

少年はゆっくりと振り向くと、そこには体中ボロボロになった男が横たわっていた。

少年はゆっくりと近づく。

「ごめんな……」

少年はなんでこの男が謝っているのかわからなかった。

だからなぜ謝ったのか聞くと、男は自分が悪いからだと言った。

男は続けてモンスターの事を話始めた。

モンスターはずっと昔からいたこと。

とても身近にいたこと。

排除しようとしたのが間違いだったこと。

共に生きていくことが正しかったこと。

他にもたくさんのか話を話していたが、少年の記憶に残っているのはこのくらいしかなかった。

それに、なんで男は自分が悪いのか話していなかった。

その事を男の話をBGMにしながら考えていた。

すると、男からその疑問を解決するキーワードが発せられた。

―俺が倒す役目なんだ―

「だけど……こんな有様だ」

少し笑いながら言ったあと、男は遠い目をしながら言った。

―俺は世界を守るヒーローなんだよ―

この姿を見て、この男の事をヒーローと思う人は多分いないだろう。

どこからどこをどう見ても、もう死ぬしかない男だ。

少年は疑いの目を向けた。

男はそれを悟ったのかどうか分からないが、再びしゃべり始めた。

この世に無敵のヒーローなんていないこと。

傷だらけになりながらも限界のところで戦うヒーローしかないこと。

自分は何人もいたヒーローの一人だということ。

今はもう自分しかないということ。

男の呼吸がだんだん荒くなっていることに気づいた少年は、そのことが気になった。

そのせいでふたたび男の話は少年の脳には残らずに素通りして行っ

た。

しばらく苦しそうに話した後、男はかろうじて動く右腕を動かした。

男の右手には、手袋のようなものが二つ握られていた。

それを震えながら少年に差し出した。

少年には理解できなかった。

なぜ渡そうとしているのか。

その手袋は何なのか。

男はかろうじて開いている右目をなおも細めて言った。

モンスターに爆弾は効かないこと。

水爆も原爆も逆にモンスターを強くさせてしまうこと。

倒せるのは

――己の全身全霊を込めた拳だけだということ――

右手に二つの手袋を握ったまま、少年の家族と同じように、男は動かなくなった。

少年は立っていた。

目の前のモンスターを見ながら。

両手に手袋をつけながら。

両手に手袋をつけた男がボロボロになって横たわっている。

その横に、少年は立っていた。

男は手袋を取って少年に差し出した。

しかし少年は受け取らない。

男はヨロヨロしながら立ち上がり言った。

「正解だ」

手袋を両手につけながら言った。

「なんであの時受け取っちゃったかな」

モンスターは業火の中で暴れまわる。

拳同士をガツンッとぶつけ合うと同時に言葉を吐き捨て、業火の中へと歩みを進めた。

—ま、後悔してないけどね—

42人目『眠れない男』 43人目『見つける男』 (前書き)

1話600文字以下のため2話同時掲載

42人目『眠れない男』 43人目『見つける男』

42人目『眠れない男』

夜、時計は12時をとくに回っている。

ガバツ

男はまたもや起き上がり部屋の中を歩き回る。

そしてトイレに行ったりホットミルクを飲んだりしてまた布団に入り眼をつむる。

しかし少し経つとパチツと目を開けてガバツと起き上がって歩き回る。

さつきからその繰り返しだ。

早く寝ないと体に悪いぞ。

次の日

「うわっ、どうしたんだよお前。眼の下にクマ出来てんじゃない。大丈夫かよ」

ほら、言わんこっちゃない。

そうやって体に異変が起きるってことは体に良くないって証拠なんだから。

ちやくんと睡眠は十分取ること。

それにしてもなんでそんなに眠れないのかねえ。

なんか不安でも抱えてんじゃないの？

「いやあ、なんていうかさあ。寝ようと思って眼をつむるだろ？そんでさあ、明日のこととか、将来のこととか考えんだよ。そうするとき、目を瞑ってるはずなのにさ

―目の前が輝きだして、眩しすぎて眠れないんだよ―」

安心しました。

精神的には健康そのものみたいですね。

今日もいつものようにつり革に捕まりながらぎゅうぎゅうの満員電車に揺られている。

あつっ苦しくてしかたがない。

こういう微妙な季節は冷房を入れて欲しいものだ。

プシュー

ここでもようやく満員から解放される。

「はあ……」

そりゃため息も出るよ。

――問題が山積みだ――

今日行く営業先には何をおみあげに持っていけばいいのかとか。

会議で頭の固い上司をどう説得しようとか。

出来の悪い部下をどうしようとか。

その他もろもろこの世は問題で溢れかえっていると痛感してしまう。

「ふはーあ……」

ガタンゴトーン

ガタンゴトーン

ふと、広告に目をやると新しいケーキ屋がオープンするらしい。

ああ、そういえば、取引先の人甘いものが好きだと言ってたよう
な……。

お、ちょうど通るから買っていこう。

ガタンゴトーン

ガタンゴトーン

ピロリロリーン

ピロリロリーン

誰かが携帯を鳴らしてるな。

ピッ

「はい、もしもし」

平然と電話に出て、悪いことだなんてこれっぽっちも考えてないん
だろうな。

「なにっ!!??」

なんだ!?

びっくりしたなあ。

「そ、そ、そ、それは一体どういうことだ!？」

そうとう大事件が起きたんだな。

「もう一回落ち着いて言ってくれ。ゆっくりとわかるように。ちゃんと順序良く言ってくれないとわからん」

結構相手は慌ててる様子だな。

そういえば、会議のとき俺って結構テンパリながらプレゼンしてたかもなあ。

ちゃんと上司にわかるようにゆっくりと順序良くしゃべろう。

でもどうすればテンパらなくなるのだろう。

「バカヤロウ!! あれほど準備はしっかりしておけって言ってただろう!!」

ああそうか。

事前の準備が大切なんだよな。

他の仕事が忙しくてあんまりプレゼンの準備に時間を割いてなかったなあ。

ガタンゴトーン

ガタンゴトーン

お、マラソンをやってるなあ。

そういえば部下も大学ではマラソンをやってたって言ってたなあ。

しかし、よくもまあこんな長い距離を

走れるよなあ。

走る前からうなだれちゃうよなあこれじゃ。

……。

ああそうか。

スタートはみんな同じなんだった。

俺の方が先にスタートを切っていたんだ。

俺も最初は出来が悪かったもんなあ。

長い目で見ることにしよう。

ゴールはまだまだ先なんだから。

ガタンゴトーン

ガタンゴトーン

あれ？

なんだか問題が解決してるぞ。

ガタンゴトーン

ああそうか。

ガタンゴトーン

世界には

――答えが隠されている――

44人目『山男』

「イタタタタ」

「おいどうした」

「靴擦れしちゃった」

ハイヒールで山登りに来るやつがあるか。

靴擦れして当たり前だ。

「じゃあもう帰るか。残念だけど」

どこが残念だ。

むしろ幸運だったのに気づかないのか。

そんな軽装で進んでいたら山が怒る。

靴擦れで済んでよかったと思うべきだ。

万が一が起ころのが人生だ。

自分には訪れないと決め付けるのがどれほど愚かなことか。

そのところをしっかりと理解してから登って欲しい。

次はもう少し上へ登ったところを見てみるとしよう。

おじさんやおばさん達のグループが登っている。

話に花が咲いていて楽しそうだな。

……しかし、見ていると山に登りに来ているのか話に来ているのかわからなくなるなあ。

周りの景色なんてまったく見ずに中間地点で昼食を取っているが、やはりその間もぺちゃくちゃとしゃべってばかりだ。

そろそろ出発しないと山頂にはつけないと思うんだがなあ。

しかし一向に腰を持ち上げようとはしない。

話は盛り上がる一方みたいだ。

別に悪いことではない。

しかしだ。

山に来たのなら、そこでしか出来ないことをするべきだ。

この前家族で来ていた登山客がいたが、子供はずっと携帯ゲームの画面を眺めていた。

自分の周りの景色や風景に、興味や魅力を感じなくなってしまっただうやって生きていくのだろうか。

結局おじさんおばさんグループはそこで散々しゃべったあげく、下山した。

山の天気はよく変わる。

ポツポツと雨が降り始める。

そんな中、かばんを降ろし、中から合羽を取り出して着る男がいた。

男はゆっくりと、杖を突きながら、時々止まり、先ほどとは違った一面を見せる山の風景を眺めながら。

男は着実に上へ上へと足を運ぶ。

そして、頂上へたどり着いた。

が。

天気は雨、あたり一面薄暗い雲で覆われている。

しかしだ。

ここまで登ってきたんだ。

その努力を認め、今日もまた至高の景色を見せてやろう。

雨が上がる。

男は右手でフードを取る。

雲が勢いよく流れ始める。

広大に横たわる灰色の雲河。

形を変えながら壮大に流れるその姿に男は恐怖すら抱いてしまう。

地球上で最も大きな河から太陽がその姿をさらす。

灰色だった雲河が真っ白に輝きだす。

男は、当たり一面に流れる雄大かつ壮大な雲河に目を、魂を奪われた。

―我は山の神―

山に敬意を払い、自然を愛で、時に休んだがあきらめることはせず、ただひたすらに上を目指した者よ。

覚えておくがいい。

この世に、

―報われない努力など存在しないということ―

45人目『頑張らない男』

一番嫌いなことは頑張ること。

一番好きなことは樂すること。

そんな俺ってダメ人間なのかなあ？

でもさ、みんなもそうなんじゃないの？

頑張るってさあ、めんどくさいんだよねえ。

なんていうかさあ、疲れるんだよ。

だから、樂するのが一番なわけ。

頑張らないでさ、氣樂にいきたいわけよ。

のほほんといきたいわけ。

だけどさあ、そういうわけに行かないのが人生？運命？宿命？人間の性？

どうしても頑張らないといけないことが起きたの。

もうやってらんないよ。

なんでそんなことやんなくちゃいけないわけ？って抗議したさもち

ろん。

だけどみんなに言いくるめられちゃってさ、結局やることになっちゃって。

そんではめになったわけ。

もう後戻りは出ないんだよねえ。

みんなの前で最終的にはやるって言っちゃったんだもん。

期待されてさあ、それを裏切るわけにはいかないじゃん？

だからまあ久々に頑張ったよ。

頑張った。

自分で言うのもなんだけど頑張ったよ。

見事にやり遂げました。

お見事だね。

自分で言うのもなんだけど見事だったよ。

俺は俺に賛辞を送るよ。

そんなバカな事を言ってる今だけどさ。

なんていうの。

もう100%頑張ってるね。

やることやってもうなにもすることないよ。

こんな楽なことってあったんだって感じ。

もう最高だね。

忘れてないよね。

俺の一番好きなことは？

そうそう、楽をすることだよ。

いいねえ。

楽だねえ。

いやあね、今回のことでわかったことがあったんだわ。

あれだ。

頑張れば頑張った分だけ、その後に楽が待ってるんだよ。

それでさっき話があったんだけどさ、なんでもまた俺にやって欲しいって言ってきたんだよ。

頑張ってる姿ってのは、誰かが必ず見てるもんなんだな。

だけどさ。

覚えてる？

俺の一番嫌いなこと。

この話を引き受けたとき、また頑張んなきゃいけないんだよね。

でもさ、ボクア思ったね。

これからは、もう頑張らないって胸を張っていえるように

精一杯頑張ろうって

46人目『解いた男』 47人目『駆け抜ける男』 (前書き)

1話600文字以下のため2話同時掲載

46人目『解いた男』

47人目『駆け抜ける男』

46人目『解いた男』

カリカリカリ

1人の男が机に向かってちびた鉛筆を動かしていた。

カリカリカリ

カリカリカリ

カリカリカリ

カリ……

男の鉛筆を動かしていた手が止まり、男は鉛筆を置いた。

「出来た……」

机の上に置かれた一枚の紙を囲みこむようにして、たくさんの人が覗き込んでいた。

「なんて言えいいのか……ただ……ただただ素晴らしいとしか言

いようがない」

「ココまで完璧な式は見たことがないよ」

「美しい……」

「しかし、ココまで導き出すのは至難の業だったんじゃないのかい？」

机から少し離れたところに立っていた男に向けて聞いた。

すると男は机に近づきながら答え始めた。

「確かに大変だった。ここまでたどり着くのにたくさんの時間を使った」

机に手をついて続けて言った。

「それでわかったんだ。

――答えを見つけるより、式を考えるほうがはるかに難しいってね――」
あらためて机の上に置かれた紙をみんなで覗き込む。

黒い文字が何行にも渡って書かれているその紙の一部分にみんなの視線は集まっていた。

一番右下に書かれていた最後の結論部分。

∴やる気Ⅱ才能

47人目『駆け抜ける男』

夜空に咲き乱れる花

開花の瞬間、爆音炸裂

爆音は熱気に乗って体に激突

俺の魂を振るわせる

滴る汗

こもった湿気に冷めない気温

背中にぶつかる音の感触

またどこかで花が咲く

上がる息に火照る体

騒がしい夜の中

誰もが花を見上げる中

数々の思いを馳せる中

夜の街を駆け抜ける

俺は走る

そして今年も

夏が終わる

48人目『雪の中を駆ける女と男』

雪の積もる道を男が女の手を引いて、白い息を大量に吐き出しながら走っている。

しかしさすがに疲れてしまったのか女が転んでしまった。

男は迷いもせずに女を抱きかかえると再び走り出した。

同じ道を今度はたいまつと、農具を片手に村中の人々が周りを見渡しながらか走ってきた。

その中の1人が足元を見て言う。

「足跡が山の方に向かってる!!きつと山を越えて逃げる気だ!!」

雪の降る山道を猛スピードで走る男。

しかし、すでに体は限界に達していた。

ドザアア!!!

雪の上を転がり雪まみれになったまましばらく動くことが出来ない。

男がゆっくりと這って近づく。

女を抱き起こし、再び立ち上がろうとした。

すると、女が言った。

「もういい。もういいから」

男は大声で言った。

「駄目だ！！！駄目に決まってる！！逃げないとうなるかわかってるだろ！？」

男は必死だった。

どうなってしまいかわかってるから。

しかし、女は首を横に振る。

どうなってしまいかわかっていても。

「いいんです。私はもういいんです」

「お前が良くても、俺には良くない！！！！」

今にも泣き出しそうな顔で、男は叫んだ。

「何が生け贄だ！！！！そんなの絶対に間違ってる！！！！」

静かに女は言った。

「私一人の命でみんなが助かるのよ。みんなの役に立って死ねるんだもの。私は嬉しいわ」

覚悟がその言葉からは感じ取れた。

「みんなが助かって、俺はどうなる！？みんなの中に俺は入っていないのかよ！！」

雪は先ほどよりも多く降ってきた。

「みんなが助かるなら、一つの命がなくなってもかまわないなんて間違ってるんだ！！この世には、一つだって消えてしまっている命なんてないんだ！！たとえ今にも消えそうなかすかな炎でも、放っておいていい命なんてないんだ！！あつてたまるか！！！！」

その声は吹雪の轟音に掻き消される。

「ましてや！！誰よりも大きく燃え盛る炎を消してしまうなんてことは、絶対にしてはいけないことなんだ！！！！」

「……………はっ」

女が闇に揺らめく幾つもの炎を見つけた。

「くそうっ」

男は辺りを見回す。

「そっちに回れ〜!!!!」

「いたか〜!!?」

「くっ、雪が多すぎる!! 離れるな!! 遭難したらおしまいだあ!!」

小さな洞窟の中に二人はいた。

時より外から小さく声が聞こえる。

二人は動くことも忘れ、しゃべることも忘れ。

狭い洞窟の中、暗闇に溶けていた。

大きく燃ゆる、炎の熱を感じながら。

小さな洞窟の中から男が勢いよく飛び出すと、一回二回と左右を見ると全速力で駆け出した。

男は雪が積もった山の中を駆けて行く。

すでに雪は、止んでいた。

茂みの中から平坦なところへ飛び出した。

今にも泣きそうな顔で足を止め、真っ白な息を大量に何回も吐き出している。

何回も周りを確認するが、そのうち前だけを向いて立ち尽くした。

見渡せる全ての景色がキラキラと光り輝く。

スターダストは男の吐く息をも輝かせる。

痛いくらい眩しい世界で、男は立っていた。

男の顔がキラキラ光る。

それはスターダストのせいなのか、それとも涙のせいなのか。

絶え間なく煌めき続けるこの世界の中、それを確かめることなど出来るはずがない。

49人目『放火男』

「本日も7件にも及ぶ放火が行われました。その手口や証言により、犯人は同一人物だと思われます」

今、ちまたをにぎわせている事件といえはこの連続放火魔のことだろう。

次々と放火していくその手口は実に巧妙で、隙がない。

現在得られている情報は性別が男だということだけだ。

「放火された本人に証言を聞くことに成功しました。独占インタビューです」

プライバシー保護のため音声は変えております。

『今まで生きて来た人生の中でもっとも衝撃的な出来事でした。一生忘れない、忘れることの出来ない出来事になったことは間違いないですね。一刻も早く放火男を見つけて欲しいです』

そんな放火された人の気持ちもむなく、男は姿をくらましながらかつと火をつけていく。

今日もまた、放火男により、火が付けられようとしていた。

真昼時、公園のベンチに背広姿の若い男が座っていた。

Yシャツのソデを炊くしあげた腕で缶コーヒーを掴みながら、深いため息をついている。

「はあー……」

コーヒーのラベルに書いてある成分表を、意味などわかるはずもないのに読み。

「はあー……」

そんな若い男の隣に、何食わぬ顔で1人の男が腰を下ろした。

男はしばらく周りの景色を見回すと、さもそれが当然の如く自然体でしゃべりだした。

「頑張りたいのに頑張れない。全力を出したいのに手を抜いてしまう。あきらめたくないのにあきらめてしまう。向き合いたいのに目をそむけてしまう」

若い男は丸めた背中をそのままに隣の男を見た。

男はまるで独り言のように話し続ける。

「だから自分はダメ人間だ。どうしようもない人間だ。一生こんな感じで、何事に対しても本気になれず、中途半端に終わるんだ。そんな自分は最低だ」

男は先ほどと変わらず、何食わぬ顔で話し続ける。

「それは間違っている。決して自分だけが本気になれないんじゃない。人間っていう生き物は

—誰もが100%の力を発揮する事を自分で押さえつけてしまっているんだ—

これは奇麗事とか理屈じゃない。

—ちゃんと心理学で証明されている事だ—

だからそんなに深く考えることではないんだ」

確かにその時、若い男の見る目が変わった。

「この事を知ってどうするかは人それぞれだ。しかし、何か1つ言えることがあるとするならば、何かを知るということは

—生まれ変わるのと同じ事なんだ—」

若い男はすつと立ち上がった。

その背中には、まっすぐに空に向けられ、胸はピンツと張っていた。
若い男はベンチから離れていく。

男は先ほどとなんら変わらずにしゃべり続ける。

「――誰にだって火種はある――」

あとはそれをどう爆発させるかなんだ」

放火男によって付けられた火は、いつまでも激しく燃え続ける。

その火を消す手だては、いまだ存在しない。

50人目『叫ぶ男』

長い長い螺旋階段を猛スピードで駆け上る。

「はあ、はあ、はあっ」

「あっ」

ドテッ

男は躓いてしまった彼女に手を伸ばす。

もう1人の男は近くにあったタルを階段の下にめがけて放り投げながら言う。

「急げ！！追いつかれる！！」

つないだ手を離すことなく階段を駆け上がり、ドアを勢いよく開けた。

そこは、高い高い塔の最上部分。

空に浮かぶ雲がすぐ近くまで迫っていた。

「ダメだ。道がない！！」

ドアを急いで閉め、背中を押し付けた男に向かい、振り返りながら言った。

階段を駆け上る音が、すぐそこまで迫っていた。

ドアを押し付けながら叫ぶ。

「行け！！たとえばそこに道が見えなくても！！！」

ドン

「踏み出せ！！！」

ドン！

「そうすればっ！！！」

ドン！！

「足元に道が現れる！！！」

ドン！！！！

「いや、もともとそこに道がなくても！！！」

ドンッ！！

「存在しなくてもっ！！！」

バキッ！！

「その踏み出した足があっ!!」

バキバキッ!!

「道を創る!!!!」

力強く地面を押し、全力で駆け始めた。

その足は一步一步確実に地面を蹴っていく。

そして、次に踏み出した足の着地地点には、その地面は存在しない。

「行けええええええええ!!!!」

その瞬間ドアが破られ、何人もの人が押し寄せた。

押し寄せた人達は地面の端まで行き、立ち止まる。

ドアの下敷きになりながら言った。

「追いかけていたいなら追いかける。お前らに踏み出す勇氣があるならな」

追いかけてきた人達は、ただ黙って見つめることしか出来なかった。

空を駆ける、二人の姿を。

51人目『そうだと思った男』

バンッ！！！

静かだった保健室の中にまで、その怒鳴り声は響いてきた。

「また……僕のクラスだ……」

真っ白な布団にくるまりながら、独り言みたいに、誰にも聞こえなくてもいいと言う感じでポツリと言った。

私は何か言わなければいけないという衝動に駆られ、無理矢理口を開けたが、言葉は出なかった。

開けた口を、静かに閉じた。

その間にも先生の太い声と、生徒達の甲高い声が消毒臭い部屋の中に染み込んでいった。

「先生……」

私はクルッとイスを回し、ベッドのほうに体を向けた。上体を起こしてこっちを見ていた。

「先生の、一番嫌いなもの。この世で一番嫌いなものって……なに？」

「……うーん……なんだろうなあ……」

すぐには浮かんでこなかった。外の桜の木をしばらく見て考えた。これというのではないが、ポツポツと嫌いなものが浮かんできた。

まず、お化けが頭に浮かんだ。ホラー映画とかは私にとって脅威だった。昨日見たCMも風呂に入る前じゃなくてほんとに良かったと思っている。

あと昆虫だ。あの足がワラワラうごめく様を想像するだけで全身に鳥肌が立つ。

それにピータン。他に……。

「僕はね」

少し考え過ぎてしまった。私は彼に目をやった。

「怒られる事なんだ」

「うん。私も嫌いだな。怒られるのは」

別に話を会わせる為に適当に言ったわけではない。本当にそう思ったのだからしかたない。それに、怒られるのが好きだなんて人はそう多くないはずだ。私もその大多数の人と同じ意見だということだ。

「僕はね。怒られるのも嫌いだけど。誰かが僕以外の誰かに怒っているのも嫌いなんだ」

確かに気分が良いものじゃない。今だってそうだ。こうやって、怒りが込められた声を聞くのは、とても気持ちが悪えてしまう。

「僕は、誰かが怒られているのを見ると、なぜだかわかんないけど

泣いちゃうんだ」

彼の眼が輝いているのがわかった。

「自分が怒られてる気がするってわけじゃないんだ。ただ、なんだか分からないけど。怒ってる人、怒られている人を見ると、どうしようもなく悲しくなっちゃうんだ」

こう思うのはとても不謹慎なことだと思う。だけどその時、心の底から思ってしまったのだからしかたがない。

綺麗だと思った。

「先生……どうしてみんな……怒られるような事をするのかな……どうして……そんな事で怒るのかな……？」

その輝きは線を描き、シートに染み込んだ。

ポロポロとホントに聞こえてきそうなくらい、彼の眼からこぼれて行く。

あごを震わせ、声を震わせ、搾り出したような声で、彼は言った。

——チヨット考えれば、わかることなのに——

知らないうちに、自分でも気づかぬうちに涙が流れていた。

私の涙も、彼のように輝ていれば嬉しいと思った。

私は涙を拭くことなく、少し微笑みながら言ったのを覚えている。

―その通りだ―

バンッ！！！！

再び何かを叩く音が、彼の鼻をすする音を掻き消すように響き渡った。

52人目『悩む男』

最近息子の様子がおかしい。

学校から帰ってつくと、すかさず「はあ……」と、ため息をつくの
のだ。

そんなこと今までなかったのに、一体どうしたというのだろうか。

ガチャッ

「ただいまあ。はあ……」

ほら、やっぱりため息だ。

一体どうしたのだ我が息子よ。

何か悩み事でもあるのか？

「いってきまあす」

ガタンッ

でも普通に遊びには行くんだよなあこれが。

うゝむ。

一緒に風呂でも入って聞きだしてみるか。

こういうときはお互い裸になって話すのが一番だからな、うん。

「今日はお父さんとお風呂に入ろうか」

「うん。いいよ。はあ……」

うゝむ。

これはかなり深刻な悩みに違いない。

心してかからねばならん。

ザパーン

「ふう。いい湯だあ」

「はあ……」

むむむっ。

体を洗っていてもため息ですか。

ここは無理に聞き出そうとはせずに、周りから攻めていくことにしよう。

「どうだ、最近学校は、楽しいか？」

やっぱり子供の悩みといえば学校にあるはずだ。

「普通だよ。楽しいよ」

「あ、そうか。ならいいんだよ」

うゝむ。

違ったか。

なら、これならどうだ？

「友達とは仲よくやってるか？」

「うん。仲良いよ」

うゝん。

そりゃそうだよなあ。

だって今日も遊びに行ってたもんなあ。

んゝ。

そうかつ！！

アレか？

「どうだ。好きな子の一人や二人、できたんじゃないのか？ん？ど
うなんだ？そこらへんは。ん？」

あのため息は、恋の病に違いない。

さあ息子よ。

遠慮せずに話して御覧。

「ええ？好きな子？んよくわかんないよ。今はみんなと遊んでるのが一番楽しいから」

違ったか……。

「ん。ん。ならいいんだ。ん。楽しいのが一番だ。ん」

さて、どうしたものか。

これは直接聞くしかないか？

でもなあ……。

「はあ……」

そうだな。

いつまでも悩んでる息子なんて、親として見ていられるもんか。

いち早く元気を取り戻して、元気な笑顔を見せてくれ。

「なあ。最近、ため息ばかりしてるけど。どうした？何か悩みがあるんなら、相談していいんだぞ」

さあ、教えてくれ。

どんなことでも、力になってやるから。

「お父さん」

おっ。

「ん？なんだ？」

「僕は、なんのために生きてるんだろう」

はい？

「僕は、なんのために生まれたの？」

え？

「ねえ、お父さん。教えてよ」

最近の子供は成長が早いというか、大人っぽいついていうけど、まさかこんな小さい子供がそんな事を考えてるなんて。

普通、中学高校あたりだろう。

そういう悩みを持つのは。

でもまあ、教えられることでよかったよ。

「ああ、わかったよ。教えてやる」

なんだか思い出すなあ。

あの時は俺も若かった。

「あのな、別に、お金持ちにならなくたっていいんだよ。テレビに出るくらい、有名にだってならなくていい。偉くだってならなくていい。ただ、

—人のために生きればいいんだ—

それだけでいいんだ。自分以外の、誰かのために生まれて、生きてるんだよ」

そう。

そうなんだよ。

「うん!! わかった!!」

お前も、お父さんも。

今、目の前にいる人のために生まれたんだよ。

そして、これから出会う人のために。

一生出会わなくても、共に同じ時間を生きている人のために。
生きてるんだ。

53人目『将来強くなるだろう男』

朝、まだ仄かに暗い空の下。太陽は雲に隠れ、風もなく、川のせせらぎと、時々鳴くカエルの声が響く中、一人の少年が舗装されていない砂利道を泣きながら走っている。

長い間着ているのだろう。いたるところに繕った跡がある。涙で前が見えないのだろう。何回もつまづきそうになりながらも、がむしやらになって前へと進んで行く。

彼は駅を目指していた。たった一人、静かに車を待つ母がいる駅へ。ただ一心に前だけを見て、膝に血を滲ませながら。

冷静に一点を見つめながら車を待っていた母が、急にキョロキョロと周りを見始めた。微かに、ほんの僅かに誰かが呼んでいる気がしたのだ。

「かあちゃあん!!」

母はすぐさま駅の入り口の方を向く。

「かあちゃあん!! かあちゃあん!!」

グシャグシャの顔をした少年が現れた。驚いたのだろう。母は何も言葉を発することが出来なかった。何かがこみ上げてきたのだろう。母は駆け寄った。

そして、2人はきつく抱擁するのだった。

「かあちゃん。かあちゃん」

息子は顔を母が着ていた着物の襟にこすりつけた。そして、声を震わせながら言う。

「なんでだよ。なんで行っちゃうんだよ」

母は一回大きく鼻をすすり、涙を拭くことなく答えた。

「何回も言ったでしょ。あなたの為だって」

すると、改札口から息を切らした一人の若い女が現れた。女は2人を見つけると、駆け寄って少年の両肩を掴んだ。

「お母さんはね。私達のために行くの。わかるでしょ？」

息子はその小さな手で力強く母の着物を掴んでいる。

「そんなのヤダ!! ずっとずっと、一緒にいるんだい!! そばにいるんだい!!」

姉は困った顔で弟の肩を揺らしながら言う。

「そんなこと言わないの!! お母さんが困ってるでしょ!? お父さんが死んだとき、みんなで決めたよね? お母さんを困らせないって。ね? だから、そんなこと言わないで」

すると、山間から黒い煙を出した汽車が顔を出した。別れの時間は刻一刻と近づいている。

そんな中、母が声を震わせながら言った。

「……ごめんね……ごめんね」

たまらず息子が大声で言った。

「何で謝るんだよ!! 俺らの為なんだろ!? それなのになんで謝るんだよ!! 謝るんだったら、もう行くなよお!!」

もう我慢できなかったのだろう。姉も涙をあふれ出させながら言う。

「そうだよおかあさん!! 謝らないでよ。そんなこと言ったら、私だって、行って欲しくない!! 行って欲しくないよ!!」

汽車が汽笛が鳴らす。ブレーキの音がする。石炭の燃えるにおいがする。母が泣きながら言う。

「もう……行かなくちゃ」

母は優しく息子に手をやり、体から離す。すると姉がじたばたと抵抗する息子をpushさえ込む。母は立ち上がる。後ろを向いて汽車に近づく。

乗り込もうと汽車に手をかけたとき、足をぎゅっと掴むものがあった。

「行かないでよ……行かないでよ……」

母はゆっくりと振り向くと、息子の頭をやさしく撫でた。

「弱い人を、守れる人になってね。お姉ちゃんを頼むね」

姉が後ろから抱きしめて引き離す。

「お姉ちゃん。あとは、よろしくね」

再び母にしがみつこうと、息子は必死に姉の束縛から逃れようとする。姉は強く抱きしめながら母を見つめる。

息子が手を伸ばしながら叫んだ。

「行やだああああ!! かあちゃあああ!! かあちゃあああ!!」

母はもう、涙を止めることが出来ない。汽車が発車の合図を鳴らす。ゆっくりと動き出す。

「かあちゃあああ!!」

「お母さああん!!!!」

姉は息子を解き放ち、一緒になって汽車と併走する。母が最後に別れの言葉を叫んだ。

「寂しくなったら空を見て!! お母さんも同じ空を見てるから!!」

「お母さああん!!」

「太陽の暖かさを感じて!! お母さんも同じように暖かくなってるから!!」

「かあちゃあああん!!」

「やさしい風を感じて!! その風にお母さんの想いが乗っているから!!」

「かあちゃあああああん!!」

「どんなに!! どんなに離れてても!!」

―世界は繋がっているから―

思わず母は、汽車の中で泣き崩れた。とめどなく流れる涙。嗚咽交じりの泣き声。それは、残された駅でも同じだった。

風が吹く。雲が流れる。太陽が顔を出し、世界を暖め始める。そして、3人を暖め始め、繋ぎ始めるのだった。

―3人の心はいつまでも繋がっている―

54人目『勇者になった男』

旅路の果て

「奴はどこに居る」

一人の勇者が剣を地面に突きたて、体重を預けながらヨロヨロと歩く。

ふいに体から力が抜けた。

地面に膝をつき、荒い呼吸を繰り返す。

思い起こすのは、遠い記憶の果て。

希望を知らなかったあの日

貧困の村。苦しい生活。一日中働いても、その空腹を満たす食料はない。その疲れた体を癒す、やわらかい布団はない。

人々は、たった一つの気持ちしかない。

—死にたくない—

そのために、そのただけに生きていた。

ある日

少年は父に言った。

「こんな生活、もうやめたい」

父は働く手を止め、息子の目を見ていた。ふいに目線はずすと、再び働き始めた。見つめていた父の顔は、何かを押しつぶしている表情に思えた。

真実を知ったその夜

少年は一人の青年に起こされた。

「ついてきて。静かに」

2人は誰にも気づかれないうちに村を出ると、近くの林の中を分け入るのだった。

「教えてあげる。真実を」

突然青年が止まる。顔だけ振り向き、少年を見る。少年は、青年の前へ歩み出る。

そこには無数に突き立てられた剣という剣。

その一つ一つに名前が刻まれた剣という剣。

「それは、すべてを闇から解き放つ剣。すべてに光を照らす剣」

月の光を反射し、光り輝く剣の森へ迷い込んだ一人の少年。

希望を知ったその時

青年は少年に真実を告げる。

―誰だって、勇者の剣を持っているんだよ―

煌めく剣の中から、見つけ出した父の名前。

その隣にあった、少年の名前が刻まれた煌めく剣。

押し殺そうにも、涙を止めることが出来ない青年が言う。

「僕達には……ただ……勇者の剣を抜く……勇氣がないんだ……」

齒を食いしばりながら、悔しそうに青年が言う。

「ただ、剣を抜くってだけの……勇氣がないんだっ」

膝を地面につけ、拳を地面に振り下ろして青年が言う。

―勇氣を持つ者……勇者が……いないんだ―

ただでさえ傷だらけで、少し触れただけでも崩れてしまいそうな青年の手。

強く打ちつけられた手から血が流れた。

ただでさえ小さく、少し強く握っただけでも壊れてしまいそうな少

年の手。

強く突き立てられた剣を力強く握った。

勇者となったその日

みんなを苦しめているのは誰だ。

こんな辛い世界を造ったのは誰だ。

未来から希望を奪ったのは誰だ。

明日から夢を奪ったのは誰だ。

あんなに生きるのに必死な人達から、

―勇者から勇気を奪ったのは誰だ―

世界の果て

「奴はどこにもいない」

世界をくまなく探し歩いたが、奴はいない。

世界をくまなく捜し歩いたが、いたのは苦しみ傷つく人たちだけ。

奴はどこにもいない。

突然の風

一つの答えを勇者に導く。

奴を見つけたのだ。

しかし、奴を倒すには、今までにない勇気が必要になった。

始める勇気よりも、止める勇気よりも。

どんな勇気よりも大きく強く、自信と信念に満ち溢れた勇気が必要になった。

自分を信じる勇気が。

今まで歩いてきた道。

自分の意思に従った判断。

今まで生きてきた日々。

自分の意思に従ったあの日。

数限らない涙。

数限りない嘆き。

数限りない餓え。

数限りない怒り。

数限りない諦め。

そのすべてが、勇者の勇気となる。

勇者の剣が天をさす。

太陽が反射し、空の雲を一段と白くする。

そして

—自分の胸を貫いた—

そうなのだ。

自分を苦しめていたのも、自分を追い詰めていたのも、自分を信じて
ることが出来なかったのも、踏み出す勇気を奪ったのも

そいつは

―自分のなかにいたのだ―

一人の少年の名が刻まれた剣から、光が解き放たれた。

それはまるで、小さなカゴの中に入れられた小鳥達が、一斉に飛び出すようだ。

そして、闇に支配されていたすべてのものに、光が注がれる。

砂漠に水を

大地に緑を

山に潤いを

風に安らぎを

自然に感謝を

時間にゆとりを

出会いに奇跡を

明日に光を

―あなたに勇気を―

どこにでもあるような、のどかな村。

いつものように、村人たちは幸せな時間を過ごしている。

遠い昔、勇者になった男と共に。

55人目『信じる男』

親父が死んだ。

享年70。

「まだ若かったのに」

葬式ではそんな言葉もちらほらと耳にした。

そりゃ親父が死んだことは悲しい。

だけど、涙を流すことはなかった。

俺にとって、親父は仕事人間だった。

朝、俺が目を覚ますと同時に、玄関の開く音がした。

夜、風呂から出ると同時に、玄関の閉まる音がした。

一人静かにビールを飲み、テレビを見ながら眠るんだ。

もちろん会話なんてなかった。

1週間しゃべらないことなんて日常だったし、最後にしゃべったのはいつだったのか、そしてどんな言葉だったのか。

思い出すことは出来ない。

こうやって、親父の部屋に入るとなぜだか緊張してしまうのも、

そのせいなのだろう。

整然とした部屋。

それはどこか現実味のない世界。

たとえるなら、そうだな、モデルルームってところか。

親父は俺に興味がなかった。

どんなときも無関心だった。

小さくうずくまって泣いているときも、夜中まで遊んでいたときも、進む道がわからず立ち止まっていたときも、親父はいつもと変わることなく玄関を鳴らす。

親父の目に、俺はどう映っていたのだろう。

どんな息子だったのだろう。

ただそこにいるだけの存在だったのだろう。

好まれもせず、嫌われもせず、愛されもせず、憎まれもせず、

――ほっとかれたんだ――

「見せるなって言われてたんだね」

母が押入れから出したのは、古ぼけたダンボール箱だった。

俺は横に座って、ふたを開けた。

整然とした部屋のなか、現実味の感じられない部屋のなか、人を感ずることの出来ない部屋のなか、このちっぽけなダンボールのなかだけには

――人の生きた証が溢れていた――

とっくの昔に捨てられていたと思ったおもちゃたち。

ぎりぎり読みとれる汚い字で書かれた作文。

やる気の感じられない空白だらけの解答用紙。

いつ撮っていたのだろう。

自分でも忘れていた自分の姿が納められたアルバム。
そこには

―俺の生きた証があった―

「これ、お父さんから」

母の手には、俺の名前宛ての白い封筒。

親父の書いた字をはじめてみたが、それが親父の手によって書かれたのだとすぐにわかった。

俺は受けとると、中から3つに折りたたまれた1枚の紙を、丁寧に取りだした。

「……………」

「.....」

「.....」

泣いた

全身を震わせ

涙はすぐに紙に染み込んだ

どんなに悲しくても

どんなに辛くても

— 声を出して泣いた —

俺は初めて

この、止めようにも止まらずに、こみ上げてくるものは何なのだろう。

親父を失った悲しみか

間違った認識で親父を見ていた自分への怒りか

いや

そんなもんじゃない。

そんなもんじゃないんだ。

嬉しくて

嬉しくて

言葉では到底あらわせない。

誰にも伝えることなど出来ない。

ただ

—嬉しすぎて—

濡れてしわがよっている男に握られた1枚の紙。

そこには、
たった一言。

—信じてる—

56人目『クレーム係りの男』

何もしたいことがなかった。だからと言って、働きたくもなかった。

だから大学に入った。

気がつくど、なにもすることなく、時間は天から降り注ぐ雨粒のように早く流れ落ちた。

「俺は一体、何がしたいんだろう」

そろそろ就職活動を始めなくてはいけない時期だ。友人達は業界研究も終わり、本命の会社を絞っている段階らしい。

俺は自分がどうなりたいのか、どうしたいのか、まったくわからない。

自分の事なのに、自分が一番わかっていないんだ。

俺はそんな自分から逃げるようにバイトに精を出した。日雇いで、仕事があれば派遣されるというやつだ。

今日はある会社のクレーム係りの仕事だ。以前にも違う会社でやったが、かなり精神的にこたえる仕事だ。だけどまあ、その分お金もいいので引き受けるんだけど。

トウルルルルル
トウルルルルル

さっそくクレームが入ったようだ。「こちらに分があると認めて、とにかく謝ればいいから」との指示を受けている。

ガチャ

「ちょっと!! 一体どういうこと!!?」

うわゝすごい怒ってるよ。ここは言われたとおり謝ろう。

「申し訳ございません。どうされましたか?」

「どうしたもこうしたもないわよ!! こんなもの作って!!」

うわゝこりゃよっぽどの欠陥品だったんだな。そういえばココがなんの会社かもよくわからないんだよなあ。

「申し訳ありませんでした。以後このようなことがないように、よりよいモノを作っていきますので」

「まったく。これじゃあいくらあって時間が足りないわよ!!」

ガチャンッ

うゝん。いったいどんな商品だったんだ?

トゥルルルル

ああ、はいはい。

ガチャ

「てめえ!! このやろてめえ!!」

ぬおっ!! いきなり怒り心頭かよ。

「すみませんすみません。本当にすみません。こちらが120%悪いです。すみません」

「つたくよう。おめえらのせえでよう。足りねえじゃねえかよコンニャロー!!」

「それは誠に申しわかりませんでした。しかし、足りないというのは一体何が」

「とぼけんじゃねえってんだ!! 感動しすぎてティッシュが足りねえんだよバーロー」

ガチャンッ

切れちゃったよ。なんか一方的だったっていうか。クレーム?

トゥルルルル

ああ、はいはい。

ガチャ

「まったくこれはどうしてくれるんだ」

「申し訳ございません。いったい何があったんでしょうか」

「これを買ったばかりに、今まで生きてくれた感謝の気持ちを伝えるのに、電話代が大変なことになってしまったよ。こういうことは注意書きのところに書いてくれないと」

「それはすみませんでした。次からは書いておきますので」

ガチャン

トゥルルルル

ガチャ

「どうして!! ねえ、一体どうして!?!」

「どうしたんですか? 理由をお聞きしないと答えることができないんですけど」

「起きてる時間がこんなに楽しくなったのに、どうして1日が24時間しかないわけ!?!」

「そういわれましても、1日は24時間ですが、人生はまだ長いと思うので、大目に見てくれませんかね」

「わかったわよう!!」

ガチャン

トゥルルルル

それから1日中こんなクレームが続いた。

「人にやさしくしたら、感謝されて、にやにやしちゃって、恥ずかしくなったじゃないか!! こんな幸せな気持ちにさせてどうする

つもりだ!!」

「働くことの素晴らしさを知って、がんばっちゃったら、大きなプロジェクトをまかされちゃったよ。失敗したらどうするんですか!!」

「使ったら、世界の貧しい子供達を助けてあげたくなって、海外青年協力隊に参加したけど、もう期限が終わっちゃったじゃないの!! 一生をかけて協力していきたいと思ってたのに!!」

そんなこんなでバイトが終わった。

「それじゃあ今日はご苦労様でした」

俺はどうしてもこのままでは帰れなかった。

「ちょっと質問いいですか？」

自分がどうなりたいたいかなんてのはわからない。
何がしたいかなんてわからない。

ただ、もっと知りたいことを知っていこう。
したいことをしていこう。

今はただ、この会社が何を作っているのか知りたいんだ。

57人目『あせっちゃった男』

寒い寒い空の下、マラソン大会へ向けて、若人は今日も走るのがある。

「はあ、はあ、はあ」

「おらあ、ちんたら走るな。大会はこの倍あるんだから」
「ひ、ひい」

この倍も走ったら死んでしまうと思ったに違いない。しかし、こういう場合、大抵死ぬことはない。みんな絶望的に考えすぎだ。走りすぎで死ぬ人なんてほとんどいやしないのに、どうしたらそういう発想が出てくるのか不思議だ。

そういう人を見たことがあるのか？それとも経験があったりして……。

まあ、なにはどうあれ、学生の頃のマラソン大会くらいで、死ぬような距離を走らされることはないので安心してもらいたい。

逆に、フルマラソン42.195kmを走らなくていいんだから、逆にラッキーと思わなきゃ。

「も、もう、はあ、走れ、ない」

「こらく歩くなあ」。制限時間内にゴールできなかったらプラス1周だって忘れるなあ」

「う、うへ」

あらあら、これは大変なことで。いま走っても苦しいし、あとで1周走るのもつらい。板ばさみ状態ですなあ。

しかしですよ、板ばさみって言っても逃げ場所はあるんだから、

そこへ行くしかないじゃないの。

いま休んで息を整えたあと、休んだ分をカバーできるペースで走ることができるのなら、そうすればいいじゃない。

だけどね、もしそれができないとわかっていた場合、もう逃げ道はないよね。どっちか選ぶしかない。

どうしても逃れられない選択があつて、嫌な選択しかなかった場合、どっちを選択するか。これって意外と迷うよね。

でもね、選ぶ基準があるんだよ。ちゃんとあるんだよ。とても理想的なね。

それはね、『我慢できるほう』を選ぶんだよ。

どっちもイヤだけど、どちらかといえどこっちの方がまだ我慢できるっていうほうを選ぶんだよ。

当たり前だけど一番大事な気がするなあ。

「おいおいおい、さっき歩いてたけど大丈夫だったか？」

「あああ、なんとかねえ」

「だけんどもどうして歩いちゃうのさ」

「だってよう。ゴールが見えねえんだもんよ。いくら走っても着かない気がすんだよなあ」

やっぱりゴールが見えないと、走る気になれないよねえ。それは、あとどれくらいで着くかってのがわからないからだねえ。

見えないことのほうがいいこともあるけど、やっぱり目標つてのは明確にあつたほうがやる気が出るよね。

距離がわかるからペースも決められるし、予定も立つ。もしもわからなかったら、途中でバテちゃったり、めちゃくちゃ時間がかかっちゃう。

やっぱりゴールは見えてないとね。でもねえ、マラソンとなるとそうそう見えないよねえ。そんなときはどうしたらいいんでしょう。申し訳ないけど、ちょっとわからないなあ。だれかわかってる人

はいないかなあ。

え？もう出た？うそ？気づかなかったけど。え？しゃべるのが早すぎた？こりゃ失敬。

ええつとですねえ、さっきの会話には続きがあったらしくて、そこでちゃんと語られてるそうです。

いやはや、ちよつとあせってしまいましたすはい。

それじゃあ、準備できてる？大丈夫そうだから、どうぞ見ちゃつて。そんでさようなら。

「おいおいおい、さっき歩いてたけど大丈夫だったか？」

「あああ、なんとかねえ」

「だれんどもどうして歩いちゃうのさ」

「だってよう。ゴールが見えねえんだもんよ。いくら走っても着かない気がすんだよなあ」

「そんなときや簡単だよ。見えなかったら、思い描けばいいのだよ」

58人目『泣くとわかっている男』

20歳。専門学校生。実家暮らし。いつもの平日。朝飯を食べていると、突然母の体に異変が起きた。

「あ、たちくらみ。ああ、だめだ。立ってられない」
そう言いながらイスに座る。

「ああおかしいこれ。頭だねきつと。ああだめだ。気持ち悪い」
俺はいつものようにテレビを見ながら「そろそろ着替えなさいといけない」と思っていた。

母はイスに座ったまま、両手を顔に当てて「ああどうしよう。だめだね、お母さん。倒れちゃうね」とネガティブな発言を繰り返す。最近の暗いニュースや、凶悪な事件を毎日みているせいだろう。

脑梗塞で倒れる芸能人なども多い。

俺は「深く考えすぎなんだ」といちおうの答えを出し、服を着替え始める。

その間も、「このまま倒れたら救急車呼んでね」、「遺書とか書いていたほうがいいかしら」、「病院へ行くまでに倒れちゃったらもうだめだね」と、自分はもうこのまま死んでしまうと決め込んだ言葉を書き続ける。

最初は母の思い込みだと気にもしていなかったが、心の隅っこで小さい、本当に小さい一つの疑問が浮かび上がった。

「もし、ホントに病気だったら？」

その疑問は驚くほどの速さで膨張していく。

「学校行っちゃうからあれだね。家で倒れたら帰ってくるまで倒れたまんまだね。したらもうダメだね。帰ってきたとき倒れてたら、まずお父さんに電話してね。ああダメだ、どうしよう」

いつもの声と、かすかだが違いを感じた。

恐れているような、そして、どこかであきらめているような声だ。

20年間一緒に暮らしてきたんだ。

それくらいわかる。

「お葬式はしなくていいからね。親戚だけでいいから。ちゃんと働いて、仕事して。でも、どうしても辛かったらやめていいんだから。それは自分がわるい訳じゃないから。ね。辛かったらお父さんに話してね、一人で抱え込まないで」

まるで遺言じゃないか。

「これは遺言だから。ちゃんと伝えたからね」

そう言っていると、「ああどうしよう」と言いながら立ち上がりトイレへ入って行った。

もう行かないと遅刻だ。

玄関へ行く。

トイレの中からしゃべりかける。

「やっぱり病院までもたないかもね。帰ってきて倒れてたらよろしくね」

靴を履く。

どうしたらいい。

俺は何ができる？

何もできない。

ドアをあけたら、もう母に会えないかもしれない。

いや、まさか。

でも……。

俺は母に最後の言葉をかける。

「歩けないんだったら……すぐに救急車呼んで。並ぶのが嫌だってだけで、呼んでる人もいるんだから」

声が震えそうになった。

必死で抑えた。

トイレの中から声がする。

「そうかい？」

「ああ」

俺は急いでドアを開けた。

いつものように階段を下りる。

俺はこのまま学校に行っていいのか？

とつぜん、ある想いが胸をよぎった。

「これは、小説にできるかもしれないな」

俺は趣味で小説を書いていた。

そのネタになると思った。

朝、突然母の体に異変があつて、だけど今日は絶対に休むわけには行かない日。

そうだな、なにかの試験の日とか。

しばらく話を考えていたら、いつのまにか駅に着いていた。

また、母のことが頭をよぎる。

俺は薄情な息子だ。

こんなときに小説のことを考えている。

ホームに電車がやってきた。

珍しく席が空いていたので座った。

あんな状態でも、母は俺のことを気づかっていた。

自分の心配をよそに、遺言を書く暇があつたらすぐに病院へ行つて欲しい。

死んだ後なんか考えないで、なにこともなかった場合、なにをするか考えて欲しい。

生きていて欲しい。

なんだか涙が出そうになって、寝るフリをした。

必死で小説の内容を考えた。

家に帰った主人公が見たのは、倒れた母か、それともいつもどおり

の母か。

どうしても倒れた母を想像してしまう自分がいやになった。

授業を受けている最中も、ときどき母のことが頭をよぎった。

ちゃんと病院へ着いていると思ったり、家で一人、静かに倒れているかもしれないと思ったり、なるべく考えないようにした。

帰りの電車。

ふと、詩のようなものが頭をよぎった。

小説で使えそうだ。

忘れないように買ったばかりの携帯電話に打つ。

そして、自分のパソコンに送信した。

それと同時に駅に着く。

エレベーターから降り、通路を歩く。

通路側の窓に光はない。

体が震えているのがわかった。

小刻みに揺れる手でドアノブに手をかける。

回して引っぱる。

ガチャン

鍵が閉まっている。

別に驚くことはない。

いつものことだ。

いつもこのあと、インターフォンを何回か押す。

そうすると母が開けるんだ。

自分に言い聞かせた。

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

電車の中で浮かんだ詩が再び頭をよぎる。

家に着き

あなたがテレビを見ていたら

私は安心して泣くでしょう

家に着き

あなたがどこにもいなかったら

私は悲しくて泣くでしょう

家に着き

あなたが笑って出迎えたなら

私はうれしくて泣くでしょう

家に着き

あなたが静かに倒れていたら

私は後悔して泣くでしょう

なんにせよ

私が家に帰ったら

私は

ひとりで泣くでしょう

59人目『溺れる男』

60人目『訪れる男』

(前書き)

1話600字以下のため、2話同時掲載

59人目『溺れる男』

60人目『訪れる男』

59人目『溺れる男』

海で出会ったあの日。勇者気取りで出発し、帰ることができずにもがきくるしむ。

消え行く意識に浮かぶ君。

続く日照り、大地は乾き、人はもがき。50度目前、熱くなった道路上、僕の目前、焼かれるあなた。

僕は驚き、かすかな響き、慌てふためき、水を差し出し、アナタは飲み干し、よろけながら立ち上がり、去り行くあなたの姿は遠い。

海で拾ったあの日。勇者気取りで持ち帰り、開けることができずにそのまま眠る。

消え行く記憶に浮かぶ君。

降り続く雨、大地に溢れ、人は溺れ。2階目前、川となった道路上、僕の目前、流れるあなた。

僕は驚き、かすかな勇気、もがき苦しみ、右手指し出し、アナタも指し出し、おぼれながらつながりあい、近づくあなたの体は熱い。

ポケットからこぼれる思い出、あなたはその手でしっかり受けとめ、光り輝き姿をかえて。

再び出会ったこの日。勇者気取りで飛び込み、助けることができずに助けられる。

消え行く意識に浮かぶ君。

眠り続ける僕、大地は静まる、人は働く。2日目^{ふつか}目前、ベッドとなつた道路上、僕の目前、見守るあなた。

僕は驚き、かすかな意識、力ふりしぼり、右手指し出し、アナタは握り返し、眠りながらつながりあい、伝わるあなたの想いは熱い。

60人目『訪れる男』

がんばっているあなたへ。

とても楽に目的地まで行ける車をあげようか。

それとも、すぐにでも欲しいものが手に入るお金をあげようか。

あなたは静かに首を振る。

ならば、小さな幸せをあげましょう。

するとあなたは泣くでしょう。

なぜならそれは、この世に溢れているのだから。

知らずに生き、いま初めて気づいたのでしょうか。

こんなにたくさんの幸せに囲まれて、

あなたは嬉しくて泣くのでしょうか。

そして、私は行くでしょう。

回りも見ずに、シャカリキにがんばる

あなたのもとへ。

61人目『わかった男』

今、電車に乗っている。

電車の走る速度がいつもの何倍も遅く感じた。

速く、速く。

俺は一心に願っていた。

電車が止まるとドアをこじ開けて外に飛び出した。

すでに電車の中で上着を脱ぎ、ワイシャツのすそをめくっておいた。

走る準備は万端だった。

階段を2段飛ばしで駆け上がってハッと気がつく。

切符を出していない……。

俺はポケットに手を入れ、切符を取り出す。

ポロッ

切符が床に落ちた。

俺は慌てて拾おうとするが切符が床とくっついてうまく指に引っかない。

やっと取って改札に入れる。

しかし、目測を誤り挿入口の一センチ上に押し当て、グニツと切符が曲がってしまった。

両手で切符を伸ばし、改札に入れる。

俺の気持ちはもうめちゃくちゃになっていた。

冷静に冷静にと思いながら一方では速く速くと後押ししてくる。

こんな気持ちになるのは初めてだった。

信号で待っている一秒一秒がもどかしい。

速く変われ。速く変われ。青になれ。青になれ。

すでによーいの体制に入っている。

ドンと言われればそのまま走っていきそうだ。

信号が青に変わると、誰よりも速く横断して行った。

ある建物に駆け込んだ。

すると急いで着替えてある部屋に入った。

そして苦しんでいる女性の手を取り、「ガンバレ」と語りかけた。

今まさに新たな生命が誕生しようとしている

男は女の手を握り締めていた

男は目を瞑り願っていた

必死で願っていた

そしてそのときがやってきた

女の顔が苦痛にゆがんだ

そしてピンッと張った糸が切れるようにその苦痛にゆがんだ顔が安堵の顔に変わる

その時、部屋を一つの光が駆け抜けた

光が男を包み込んだ瞬間

男はわかった

自分が生まれたわけを

生きる理由を

この小さな光のために俺は生き

そして生まれたんだ

すべてを捧げ この小さな光を太陽よりも輝かせてみせよう

この命 燃え尽きる一瞬まで

この光 燃えさかれ 一生涯

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5529a/>

男達

2010年11月4日01時32分発行